秋田県文化財調査報告書第287集

姫ヶ岱C遺跡

── 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ ──

1999・3

秋田県教育委員会

姫ヶ岱C遺跡

―― 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ ――

1999・3

秋田県教育委員会

序

秋田県は、世界遺産に登録された白神山地や十和田湖、鳥海山など豊かな自然に恵まれております。この豊かな自然の中で、先人たちが育み築きあげた歴史、文化が様々な形で文化遺産となっております。地下に眠る埋蔵文化財もその文化遺産の一つであります。

姫ヶ岱Ｃ遺跡は、1988（昭和63）年に公示された「森吉山ダムの建設に関する基本計画」に基づくダム建設事業の対象区域内に確認された60遺跡のうちの一つです。姫ヶ岱Ｃ遺跡の発掘調査は、1997（平成９）年に深渡遺跡・姫ヶ岱Ｄ遺跡と同じく、秋田県教育委員会による「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査」として行われました。

この発掘調査では、縄文時代の土坑や石囲炉などを検出し、縄文人たちの生活の場であったことがわかりました。

本報告書は、調査の記録をまとめたものです。この報告書が、森吉地区の地域史の解明と、文化財に対する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力いただきました建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所、森吉町、森吉町教育委員会ならびに関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成１１年３月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　　清

例　言

1．本報告書は1997（平成９）年度に行われた秋田県教育委員会による姫ヶ岱Ｃ遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

2．発掘調査は、遺跡面積8,600m^{2}のうち、2,000m^{2}を対象として実施した。

3．本報告書は秋田県教育委員会が発行する森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては第２冊目にあたる。

4．調査結果については、秋田県埋蔵文化財調査報告会資料（平成10年３月）等でも公表してきたが、本報告書の内容がそれらに優先する。

5．本報告書の草稿執筆は吉川孝が行い、牧野賢美が編集を行った。

6．本報告書の作成にあたり、以下の方々から御指導・御助言をいただいた。記して謝意を表する。（敬称略・五十音順）

稲野裕介［北上市立埋蔵文化財センター］、川村正［七ヶ浜町歴史資料館］、鈴鹿良一、能登谷宣康、本間宏［(財）福島県文化センター］

7．第５章「自然科学的分析」は、株式会社古環境研究所に委託したものである。

8．本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行50,000分の１「米内沢」「大葛」「鷹巣」「大館」同じく25,000分の１「阿仁前田」「太平湖」、及び建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所作成1,000分の１「森吉山ダム貯水池平面図」である。

9．本報告書における土層注記中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」（1997年版）によった。

凡　例

1．本報告書に収録した遺構実測図の方位は、真北を示す。真北と磁北との偏角は、西に8°10′である。

2．本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1/40を原則とし、適宜1/20も用いている。遺物実測図の縮尺は、土器・石器とも1/2とした。挿図にはそれぞれスケールを付している。

3．挿図中の遺物実測図には、器種を問わず通し番号を付した。それらは写真図版中の番号と対応する。

4．土層注記は、基本層位にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）、遺構堆積土にはアラビア数字（1・2・3・・・）を用いた。

5．遺構番号は、その種別を問わず、プラン検出順に01から始まる2桁の連番を付したが、精査の過程において遺構でないと判断したものは欠番となっている。

6．出土遺物の量を表す際などに用いる「整理用コンテナ」の大きさは内寸で縦54cm、横34cm、深さ20cmで、その容積は約37ℓである。

7．遺構・遺物の種類を表す際、基本的に下記の略号を用いる。

〈遺構〉

ＳＫ・・・土坑・土坑墓　　ＳＮ・・・焼土遺構　　ＳＱ・・・配石遺構

〈遺物〉

ＲＰ・・・土器（片）　　ＲＱ・・・石器及び剥片　　Ｓ・・・・礫

8．挿図中に用いたスクリーントーンは、以下のとおりである。これ以外は挿図中に凡例を示す。

焼　土　　地　山　　石器に付着するアスファルト

目　次

序……i

例　言……iii

凡　例……iv

目　次……v

挿図・表・図版目次……vi

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過……1

第２節　調査の組織と構成……2

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地……5

第２節　遺跡の歴史的環境……5

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観……１２

第２節　調査の方法……１２

第３節　調査経過……１３

第４章　調査の記録

第１節　基本層位……１６

第２節　検出遺構と出土遺物……１７

第３節　遺構外出土遺物……２０

第５章　自然科学的分析

第１節　姫ヶ岱Ｃ遺跡出土炭化材の樹種同定……３６

第２節　姫ヶ岱Ｃ遺跡における放射性炭素年代測定結果……３７

第６章　まとめ……３９

挿図・表・図版目次

第１図　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群……４
第２図　周辺の遺跡分布図……９
第３図　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡……１１
第４図　遺跡調査範囲……１４
第５図　グリッド設定図……１５
第６図　基本土層図……１６
第７図　遺構配置図……２１
第８図　SK02・SK03・SK04・SK05……２２
第９図　SK07・SK08・SK11……２３
第10図　SK12・SK13・SK14・SK16……２４
第11図　SQ10・SN01・SN09……２５
第12図　遺構内出土遺物……２６
第13図　遺構外出土土器（１）……２９
第14図　遺構外出土土器（２）……３０
第15図　遺構外出土土器（３）……３１
第16図　遺構外出土石器（１）……３２
第17図　遺構外出土石器（２）……３３
第18図　遺構外出土石器（３）……３４
第19図　遺構外出土石器（４）……３５

第１表　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群……４
第２表　周辺の遺跡……１０
第３表　遺構内出土石器観察表……２６
第４表　遺構外出土石器観察表……３５

図版１　遺跡遠景・SK02完掘状況・SK03完掘状況
図版２　SK04完掘状況・SK05炭化材出土状況・SK07完掘状況
図版３　SK08完掘状況・SK11土層断面・SK12遺物出土状況
図版４　SK13完掘状況・SK14完掘状況・SK16完掘状況
図版５　SQ10完掘状況・SN01土層断面・SN09確認状況
図版６　遺構内出土遺物
図版７　遺構外出土土器（１）
図版８　遺構外出土土器（２）
図版９　遺構外出土土器（３）
図版10　遺構外出土石器（１）
図版11　遺構外出土石器（２）・炭化材断面顕微鏡写真

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

1972（昭和47）年7月3日、北九州で始まった梅雨前線による集中豪雨は、日本列島を縦断し全国各地に被害をもたらしながら13日まで続いた。秋田県での被害も甚大で、本県に天災融資法と激甚災害法が適用されるとともに、能代市・二ツ井町・森吉町・合川町・西仙北町・角館町には災害救助法が適用された。中でも特に被害が大きかったのが米代川下流域に位置する能代市と二ツ井町であった。

翌1973（昭和48）年3月、建設省は「米代川工事実施基本計画」を改め、水量を上流ダム群によって調節することとなった。こうした上流ダム群の一つとして阿仁川支流・小又川に建設されることになったのが阿仁川ダムである。後に森吉山ダムと名称が変更されたこのダムは、洪水調節のほか、灌漑用水の供給、水道水の供給、水力発電などを目的とする多目的ダムで、森吉町森吉字桐内から深渡地内までが建設事業に係ることが決定した。

森吉山ダム建設にともない事業対象区域内の住民の移転が進む中、事業主体である建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所は、文化財保護法に基づき、秋田県教育委員会に対し貯水池流域面積248.0km^{2}の遺跡分布調査を依頼した。秋田県教育委員会は、遺跡分布調査を1992(平成4)年・1993（平成5）年の2ヵ年にわたって実施し、その結果、桐内遺跡（縄文時代前期・後期）・二重鳥遺跡（縄文時代後期）・漆下遺跡（縄文時代後期）・栩岱（とちたい）遺跡（縄文時代後期・晩期）・砕渕（じゃきぶち）遺跡（縄文時代）・丹瀬口遺跡（縄文時代後期）の新発見の遺跡6ヵ所が開発区域に係ることを確認した。この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は協議を重ね、1991（平成3）年発行の『秋田県遺跡地図（県北版)』に記された「周知の遺跡」、及び遺跡分布調査で発見された「新発見の遺跡」の双方についての範囲確認調査を秋田県教育委員会へ実施依頼し、遺構・遺物の広がりを把握していくことを申し合わせた。

秋田県教育委員会では、1994（平成6）年度より範囲確認調査を実施し、1998（平成10）年度にすべての遺跡の範囲確認調査を終了した。範囲確認調査を行った遺跡は以下の遺跡である。

1994（平成6）年度

桐内C（桐内Ⅰ）遺跡、桐内D（桐内Ⅱ）遺跡、桐内沢遺跡

1995（平成7）年度

日廻岱A遺跡、日廻岱B遺跡、漆下遺跡、上ハ岱A遺跡、上ハ岱B遺跡、二重鳥A遺跡、二重鳥B遺跡、二重鳥C遺跡、二重鳥D遺跡、二重鳥E遺跡、二重鳥F遺跡、二重鳥G遺跡、二重鳥H遺跡、水上遺跡、天津場A遺跡、天津場B遺跡、天津場C遺跡、ネネム沢A遺跡、ネネム沢B遺跡、ネネム沢C遺跡、森吉家ノ前A遺跡、森吉家ノ前B遺跡、森吉家ノ前C遺跡、森吉A遺跡、森吉B遺跡

1996（平成8）年度

上悪戸A遺跡、上悪戸B遺跡、上悪戸C遺跡、上悪戸D遺跡、桐内A遺跡、桐内B遺跡、姫ヶ岱A遺跡、姫ヶ岱B遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、橋場岱A遺跡、橋場岱B遺

跡、橋場岱Ｃ遺跡、橋場岱Ｄ遺跡、橋場岱Ｅ遺跡、橋場岱Ｆ遺跡、橋場岱Ｇ遺跡、向様田Ａ遺跡、向様田Ｂ遺跡、向様田Ｃ遺跡、向様田Ｄ遺跡、向様田Ｅ遺跡、向様田Ｆ遺跡

1997（平成９）年度

深渡遺跡、深渡Ａ遺跡、鷲ノ瀬遺跡、地蔵岱遺跡、地蔵岱Ａ遺跡、惣瀬遺跡

1998（平成10）年度

鷲ノ瀬遺跡

範囲確認調査の進捗中の1994（平成６）年に、1998（平成10）年８月に第12回日本ジャンボリーが森吉山麓で開催されることが決定した。1994（平成６）年度のダム工事着工とあいまって、県道比内・森吉線（旧小滝・阿仁前田停車場線）などジャンボリー開催に向けたアクセス道路の整備が急務となり、1995（平成７）年に日廻岱Ａ遺跡・砕渕遺跡、1996（平成８）年には上悪戸Ｄ遺跡・深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前Ｂ遺跡・天津場Ｃ遺跡のアクセス道路線部を、森吉町教育委員会が調査した。

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、範囲確認調査を行った遺跡の中から、工事工程に合わせて、発掘調査を実施することが森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会で合意している。

姫ヶ岱Ｃ遺跡の発掘調査は、1997（平成９）年８月25日から10月９日まで、総面積8,600m^{2}のうち2,000m^{2}を調査した。秋田県教育委員会による森吉山ダム建設事業に係る発掘調査としては、石組石棺墓が発見されたことで話題となった深渡遺跡、姫ヶ岱Ｃ遺跡に先立って行われた姫ヶ岱Ｄ遺跡とともに初めての調査となった。なお同年には、森吉町教育委員会によって上悪戸Ａ遺跡の発掘調査が行われた。

参考文献

無明舎　『秋田県昭和史』　無明舎　1989（平成元）年

秋田魁新報社　『ダムに沈む「むら」森吉町森吉』　モリトピア選書１　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1992（平成４）年

川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993（平成５）年

森吉町教育委員会　『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書』　1996（平成８）年

森吉町教育委員会　『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書』　1997（平成９）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第251集　1994（平成６）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第259集　1995（平成７）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996（平成８）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成９）年

第２節　調査の組織と構成

遺跡所在地　　姫ヶ岱Ｃ遺跡（略号2ＨＧＴ－Ｃ）　秋田県北秋田郡森吉町根森田字姫ヶ岱12－2外

調査期間　1997（平成９）年８月25日～10月９日

調査目的　森吉山ダム建設事業に係る発掘調査

調査面積　2,000m^2（遺跡総面積8,600m^2）

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者　吉川　孝　（秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事）

村上　義直　（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員）

（現、文化財主事）

総務担当者　藤肥　良清　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）

（現、秋田県教育庁福利課課長補佐）

荒井　信行　（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室主査）

佐藤　幸嗣　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

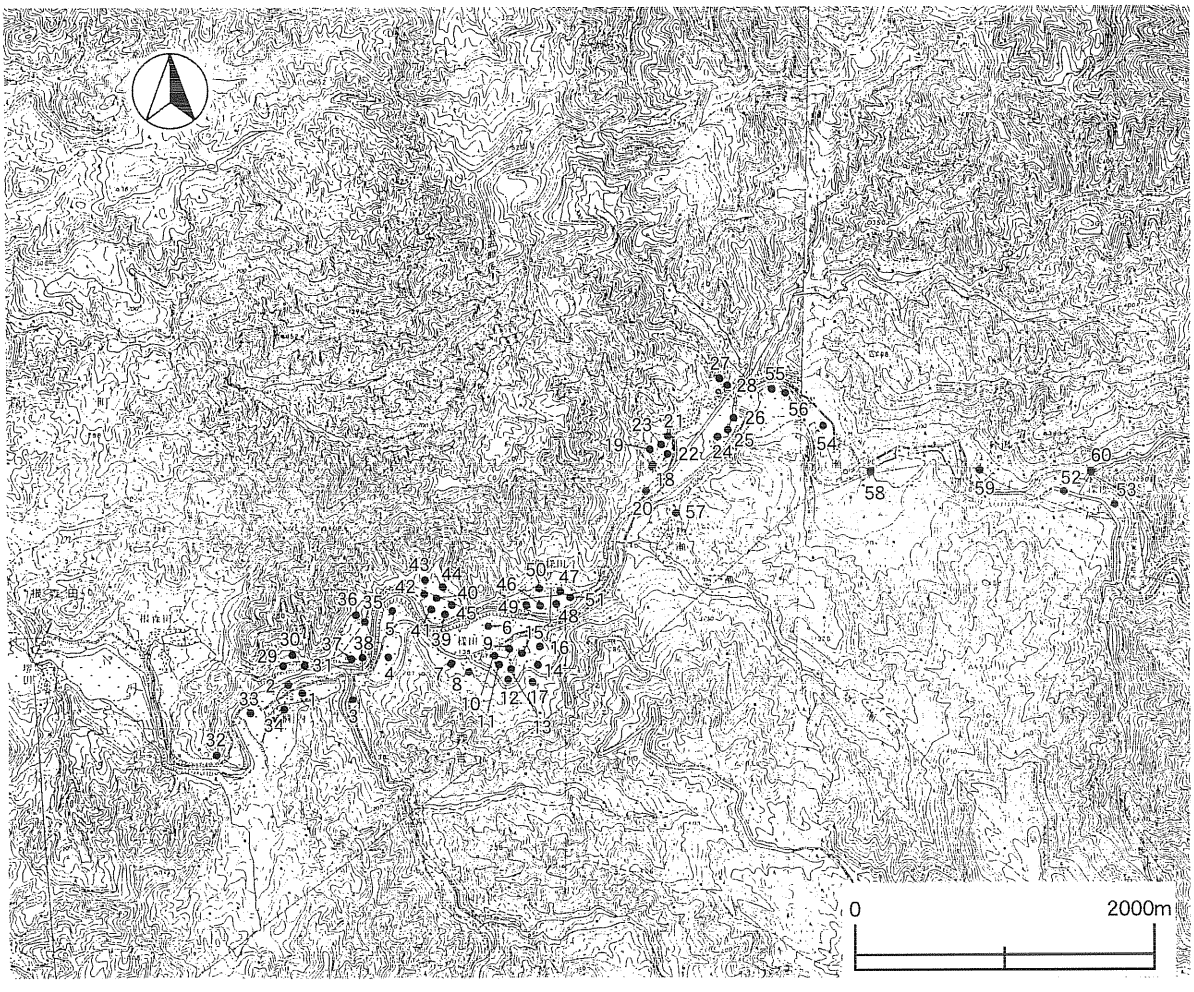
須田　輝樹　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

（現、秋田県立図書館主事）

調査協力機関　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所

森吉町

森吉町教育委員会



第１図　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

番号	遺跡名	遺跡所在地	時期
1	桐内C	森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文前～後期
2	桐内D	森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文後期
3	桐内沢	森吉町森吉字桐内沢関下タ103	縄文前～後期
4	日廻岱A	森吉町森吉字日廻岱63-1,65外	縄文前・後期
5	日廻岱B	森吉町森吉字日廻岱86,87,88,89,90,91	縄文前・後期
6	漆下	森吉町森吉字漆下2-1,4,5,6,7,8,14-2,37外	縄文前・後期
7	上ハ岱A	森吉町森吉字上ハ岱102,104,105,106外	縄文晩期
8	上ハ岱B	森吉町森吉字上ハ岱70,71,72	縄文晩期
9	二重鳥A	森吉町森吉字二重鳥31-1,32-2,47-1,106-1,134,135	旧石器・縄文前・後・晩期
10	二重鳥B	森吉町森吉字二重鳥11,99,100外	旧石器・縄文前～晩期
11	二重鳥C	森吉町森吉字二重鳥93,94,95,96,97,110	縄文前～後期
12	二重鳥D	森吉町森吉字二重鳥39	縄文後期
13	二重鳥E	森吉町森吉字二重鳥65,66-1,69,70-2,70-3	縄文前・後・晩期
14	二重鳥F	森吉町森吉字二重鳥124-1	縄文中・晩期
15	二重鳥G	森吉町森吉字二重鳥80,81-1,84-1	縄文晩期
16	二重鳥H	森吉町森吉字二重鳥6,14,15	縄文晩期
17	水上	森吉町森吉字水上42-1,43-1,44,113-6外	縄文中・晩期
18	天津場A	森吉町森吉字天津場15-3	縄文後期・古代
19	天津場B	森吉町森吉字天津場16-1	縄文後期
20	天津場C	森吉町森吉字天津場87-1,87-3,88-2	縄文後期
21	ネネム沢A	森吉町森吉字ネネム沢26,27,28,29,30,31,32,33,34,35	旧石器・縄文晩期・古代
22	ネネム沢B	森吉町森吉字ネネム沢17,19,22	縄文後期
23	ネネム沢C	森吉町森吉字ネネム沢6-1	縄文晩期
24	森吉家ノ前A	森吉町森吉字森吉家ノ前50,145,174,175,176,177,178	縄文後期・古代
25	森吉家ノ前B	森吉町森吉字森吉家ノ前138,139,140,141,142	縄文前～晩期・室町時代
26	森吉家ノ前C	森吉町森吉字森吉家ノ前101-1,103,114,115,116	中世
27	森吉A	森吉町森吉字森吉95	縄文後期・古代
28	森吉B	森吉町森吉字森吉69	縄文後期
29	上悪戸A	森吉町森吉字上悪戸4-1,9,10-1,11-1・2,12-1～4,13,14-1,16-1・2外	縄文後期
30	上悪戸B	森吉町森吉字上悪戸8-12	弥生後期

番号	遺跡名	遺跡所在地	時期
31	上悪戸C	森吉町森吉字上悪戸7,8-9	縄文後期
32	上悪戸D	森吉町森吉字上悪戸34-7,34-29～41,34-60・61・67,54外	縄文後・晩期
33	桐内A	森吉町森吉字桐内前田5-1,6-1・3外	縄文後期
34	桐内B	森吉町森吉字家ノ下16、字桐内33-1、34～37外	縄文晩期
35	姫ヶ岱A	森吉町森吉字姫ヶ岱8,9-1,10-1	縄文前期
36	姫ヶ岱B	森吉町森吉字姫ヶ岱14-10～12	縄文時代
37	姫ヶ岱C	森吉町森吉字姫ヶ岱12-2～11,15外	縄文中期
38	姫ヶ岱D	森吉町森吉字姫ヶ岱12-31外	縄文中期
39	橋場岱A	森吉町森吉字橋場岱48,49,50-1外	縄文中・後期
40	橋場岱B	森吉町森吉字橋場岱69,78外	縄文後・晩期
41	橋場岱C	森吉町森吉字橋場岱42,62外	縄文後・晩期
42	橋場岱D	森吉町森吉字橋場岱110-1	縄文晩期
43	橋場岱E	森吉町森吉字橋場岱109	縄文時代
44	橋場岱F	森吉町森吉字橋場岱101,103,104	縄文晩期
45	橋場岱G	森吉町森吉字橋場岱6-1,39,40,46	縄文後期
46	向様田A	森吉町森吉字向様田家ノ下モ8,9-1・2,11,16,81,81-1,82,83,84	縄文晩期
47	向様田B	森吉町森吉字向様田家ノ下モ67-1・2,70,71-1,72,74,75外	縄文後・晩期
48	向様田C	森吉町森吉字向様田家ノ下モ76,77,78,79	縄文後・晩期
49	向様田D	森吉町森吉字向様田家ノ下モ14-1,17,18,19-1,20	縄文晩期
50	向様田E	森吉町森吉字向様田家ノ下モ36,37,39,63,64	縄文前期
51	向様田F	森吉町森吉字向様田家ノ下モ58,59外	縄文後期
52	深渡	森吉町森吉字深渡家ノ前102-1外	縄文前～晩期
53	深渡A	森吉町森吉字深渡29外	縄文後・晩期
54	鷲ノ瀬	森吉町森吉字鷲ノ瀬80外	縄文中・後期
55	地蔵岱	森吉町森吉字地蔵岱74外	縄文前～後期・平安時代
56	地蔵岱A	森吉町森吉字地蔵岱124外	縄文中・後期
57	惣瀬	森吉町森吉字惣瀬86外	縄文後期・平安時代
58	栩岱	森吉町森吉字栩岱74外	縄文後・晩期
59	砕渕	森吉町森吉字砕渕124外	縄文後期
60	丹瀬口	森吉町森吉字丹瀬2－1外	縄文後期

第１表　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

姫ヶ岱Ｃ遺跡は、北秋田郡森吉町根森田字姫ヶ岱12－2外（北緯40°02′16″、東経140°28′17″）に所在する。

遺跡の所在する森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と、鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。町は、東は鹿角市・仙北郡田沢湖町、北は北秋田郡比内町・鷹巣町・合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の北秋田郡阿仁町との境に、町名の由来となった標高1,454mのアスピーテ・トロイデ複式火山である森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地をはさんで、北北東に小繋森（標高1,010m）、北に高烏帽子（標高764m）、北西に源五郎岳（標高559m）などが東西に連なっており、森吉山山頂からの距離は、いずれも約10～11kmである。これらの山地は分水嶺をなし、行政区分上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。

本遺跡の近くを流れる小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高1,119m）・柴倉岳（標高1,178m）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支川を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川に合流する。（流域面積は約264.8km^2、幹線流路延長は約38.8kmである。）

小又川沿いには集落・耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大６段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側から山が迫ってきており、おおむね小又川右岸側にあたる北側山地（本遺跡周辺では源五郎岳山地）の山腹斜面の方が勾配が急である。各集落は主に山麓の平地縁辺部に集村形態をとりながら形成されており、平坦地中央部の多くは畑地や水田として利用されていた。

昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともにほ場整備事業が行われた。現在は森吉山ダム建設のために、桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

遺跡は東西に長い森吉町のほぼ中央部に位置し、町北部の米内沢地区にある森吉町役場の南東約11km、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅の東南東約５kmに立地する。姫ヶ岱Ｃ遺跡の標高はおよそ131～134mで、遺跡は南北190m、東西60mの南北に細長い形をしている。

第２節　遺跡の歴史的環境

森吉町には、『秋田県遺跡地図（県北版）』（1991年発行）によると、58ヵ所（名勝及び天然記念物を除く）の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が周知されており、その地域的内訳は、旧米内沢町では本城２・米内沢21・浦田７、旧前田村では五味堀６・小又２・阿仁前田８・根森田３・森吉９となっている。ただし同書刊行後に、堤沢川流路溝工事にともなう分布調査で諏訪岱遺跡（米内沢字諏訪岱）が発見され、また秋田県教育委員会による1992（平成４）～1993（平成５）年度の森吉山ダム建設事業

に係る分布調査と、1994（平成６）年度からの同事業に係る遺跡範囲確認調査の結果、合計60遺跡が小又川流域の根森田地区・森吉地区で新たに発見された。

森吉町では、ダム建設事業に係る遺跡範囲確認調査の実施された1994（平成６）年度以前においては、旧石器時代の遺跡は確認されていなかったが、これらの調査により、森吉地区のネネム沢Ａ遺跡で旧石器時代の遺物が確認された。

縄文時代では、1992（平成４）年度の桂の沢遺跡（根森田字桂ノ沢）の発掘調査では貝殻沈線文・条痕文の施された土器が出土しており、森吉町でも縄文時代早期以前に人々が生活していたことが初めて明らかになった。前期は、前掲『遺跡地図』に３遺跡が記載されている。桂の沢遺跡で「早稲田６類」「大木２式」、奥山潤氏命名による「茂屋下岱式」「円筒下層ｄ式」の土器が出土している。また、長野岱Ｉ遺跡（米内沢字長野岱）では、前期後葉（円筒下層ｃ式期）の遺構・遺物が検出されている。中期～晩期の遺跡として、白坂遺跡（浦田字白坂）・塚の岱遺跡（浦田字塚の岱）は戦前より知られる縄文晩期の大規模遺跡である。

弥生時代では、吉野Ｉ遺跡（米内沢字吉野）・長野岱Ｉ遺跡・上悪戸Ｂ遺跡（森吉字上悪戸）で遺物が出土しているが、遺跡数は少ない。

古代にあっては、現在の森吉町域を含む阿仁川・小阿仁川流域は『日本三代実録』に記す「榲渕（すぎぶち）村」に擬定されており、令制郡外の地と考えられている。狐岱遺跡（米内沢字狐岱）や諏訪岱遺跡などでは平安時代の集落跡が確認されており、森吉地区でも天津場Ａ遺跡・ネネム沢Ａ遺跡・森吉家ノ前Ａ遺跡で古代の遺構・遺物を確認している。

中世以降の遺跡では、いわゆる中世城館が町全域で10ヵ所ほど確認されている。そのうち旧前田村にあたる町南部に所在するのは、阿仁前田地区の前田館、五味堀地区の花館・天館、根森田地区の仲ノ又館である。本遺跡に近い仲ノ又館は、現地で「タテデッコ」「タテジャコ」と呼ばれており、空堀や見張り台跡がある。森吉地区では中世城館跡は確認されていないものの、森吉家ノ前Ｂ遺跡で馬具の一部と思われる金具と、室町時代の作と思われる珠洲系陶器が出土しており、小滝新兵ヱ岱遺跡出土の鎌倉時代制作の青銅古鏡とともに、当該地区の中世の様相を示す数少ない資料となっている。

森吉町ではこれまでに、1954（昭和29）年度の狐岱遺跡、1967（昭和42）年度の長野岱Ｉ遺跡、1968（昭和43）年度の塚の岱遺跡、1989（平成元）年度の狐岱遺跡・山崎遺跡・吉野Ｉ遺跡・吉野Ⅱ遺跡、1991（平成３）年度の諏訪岱遺跡、1992（平成４）年度の桂の沢遺跡、1992（平成４）～1993（平成５）年度の白坂遺跡、1995（平成７）年度の日廻岱Ａ遺跡・砕渕遺跡、1996（平成８）年度の上悪戸Ｄ遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前Ｂ遺跡・深渡遺跡・天津場Ｃ遺跡、1997（平成９）年度の姫ヶ岱Ｃ遺跡・姫ヶ岱Ｄ遺跡・深渡遺跡・上悪戸Ａ遺跡、1998（平成10）年度の桐内Ｃ遺跡の計20遺跡の発掘調査が実施されている。以下、1996（平成８）年度以前の、森吉山ダム建設事業に係る遺跡について、その概略を示したい。

狐岱遺跡は、1954（昭和29）年、大和久震平氏が発掘調査を行った。この遺跡は、縄文時代前期後葉から中期前葉の円筒土器が出土した遺跡として、また、大和久氏が円筒上層ａ式土器（中期）の直前に「仮称狐岱式」を提唱、その後「円筒上層式の細分」論へと発展させる契機となったことでも知られる遺跡である。狐岱遺跡は、その後、森吉山ダム建設事業（代替農地・宅地造成）に係り、1989（平成元）年に秋田県教育委員会が範囲確認調査を実施した。その結果、主に縄文時代前期後葉から後

期後葉の大規模な集落跡（推定面積15km²）で、配石遺構・土手状盛土遺構のあることが判明した。その後、同時に調査した吉野Ⅰ遺跡・吉野Ⅱ遺跡・山崎遺跡とともに遺跡全体が盛土された後、保存がはかられることになった。現在は水田となっている。

日廻岱Ａ遺跡（森吉字日廻岱）と砕渕遺跡（森吉字砕渕）は、1995（平成７）年、森吉山ダム建設にともなう工事用道路が、1998（平成10）年開催の第12回日本ジャンボリーに使用されることとなったため、道路として使用される箇所について、森吉町教育委員会が発掘調査を実施した。日廻岱Ａ遺跡では土坑６基、砕渕遺跡では土坑２基などを検出した。遺物は、前者は縄文時代後期のものが多く、中期の土器がそれに次ぐ。後者は仮称狐岱式を含む縄文時代中期のものがほとんどである。

上悪戸Ｄ遺跡（森吉字上悪戸）、地蔵岱遺跡（森吉字地蔵岱）、深渡遺跡（森吉字深渡）、森吉家ノ前Ｂ遺跡（森吉字家ノ前）、天津場Ｃ遺跡（森吉字天津場）の５遺跡は、前年同様日本ジャンボリーアクセス道路として建設されることとなった県道比内・森吉線改良工事に係る発掘調査として森吉町教育委員会が発掘調査を実施した。

上悪戸Ｄ遺跡では、縄文時代の石囲炉・土坑などを検出し、縄文時代中期末葉から晩期中葉の遺物を検出した。

地蔵岱遺跡では、縄文時代前期初頭から後期初頭にかけての捨て場１ヵ所と土坑67基を検出しており、土器・石器のほか円盤状石製品や板状土偶・円板状土製品が出土した。また、古代のものと思われる製鉄関連遺構１基を検出し、遺構外からはフイゴの羽口・鉄滓も出土した。

森吉家ノ前Ｂ遺跡では、縄文時代の石囲炉・焼土遺構・配石遺構や、中世（室町時代後半）の住居跡などを検出している。遺物は、縄文時代後期のほか、中世の陶器・鉄製品及び炭化材が前掲住居跡から出土した。

深渡遺跡では、土器埋設遺構18基、石囲炉６基のほか、配石遺構・土坑・焼土遺構などを検出した。縄文時代中期初頭から晩期初頭にかけての複合遺跡と考えられる。

天津場Ｃ遺跡では、土坑・柱穴様ピットを検出し、縄文中期中葉から後期初頭にかけての土器が出土した。

以上５遺跡のうち、深渡遺跡は、森吉町教育委員会で発掘調査を行った翌年の1997（平成９）年に、調査区（調査面積919m²）の東側に隣接した部分を秋田県教育委員会が発掘調査した。4,000m²を調査し、竪穴住居跡・土坑のほか石組石棺墓１基を検出した。石組石棺墓の内部には何かを焼いた痕跡があり、「火葬の可能性あり」として大きく報道された遺跡である。

参考文献

秋田県農政部農地整備課　『大野台開発計画区域土地分類基本調査　米内沢』　1978（昭和53）年

川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993（平成５）年

角川書店　『角川日本地名大辞典　５　秋田県』　1980（昭和55）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　1991（平成３）年

秋田県　『秋田県史　考古編』　1977（昭和52）年

奈良修介・豊島昂　『秋田県の考古学』　郷土考古学叢書３　吉川弘文館　1966（昭和41）年

大和久震平　「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」『昭和三十二年度調査研究報告』　秋田県文化財保護協会 1958（昭和33）年

大野憲司　「狐岱遺跡について～1989年の範囲確認調査から～」　『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第５号 1990（平成２）年

大和久震平　「円筒上層式の細分」　『秋田考古学』第16号　秋田考古学協会 1960（昭和35）年

森吉町　「民俗資料ならびに考古学資料調査の協力依頼について」　『広報　もりよし』第127号 1968（昭和43）年

森吉町教育委員会　『諏訪岱遺跡』　～堤沢川流路溝工事にかかる発掘調査報告～　1992（平成４）年

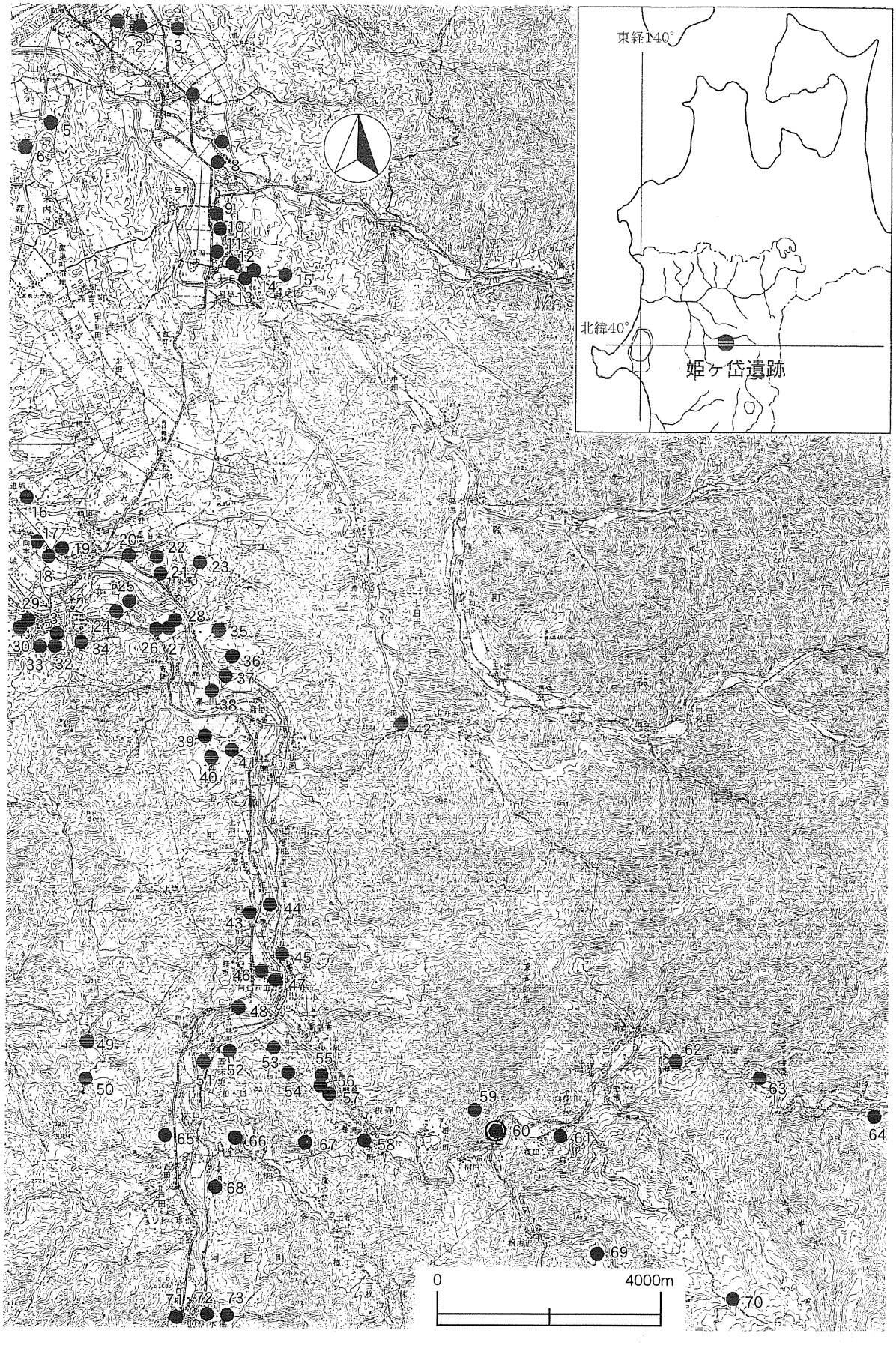
森吉町教育委員会　『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書』　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～　1996（平成８）年

森吉町教育委員会　『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書』　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～　1997（平成９）年

森吉町教育委員会　『上悪戸Ｄ遺跡発掘調査報告書』　～比内・森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～　1997（平成９）年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

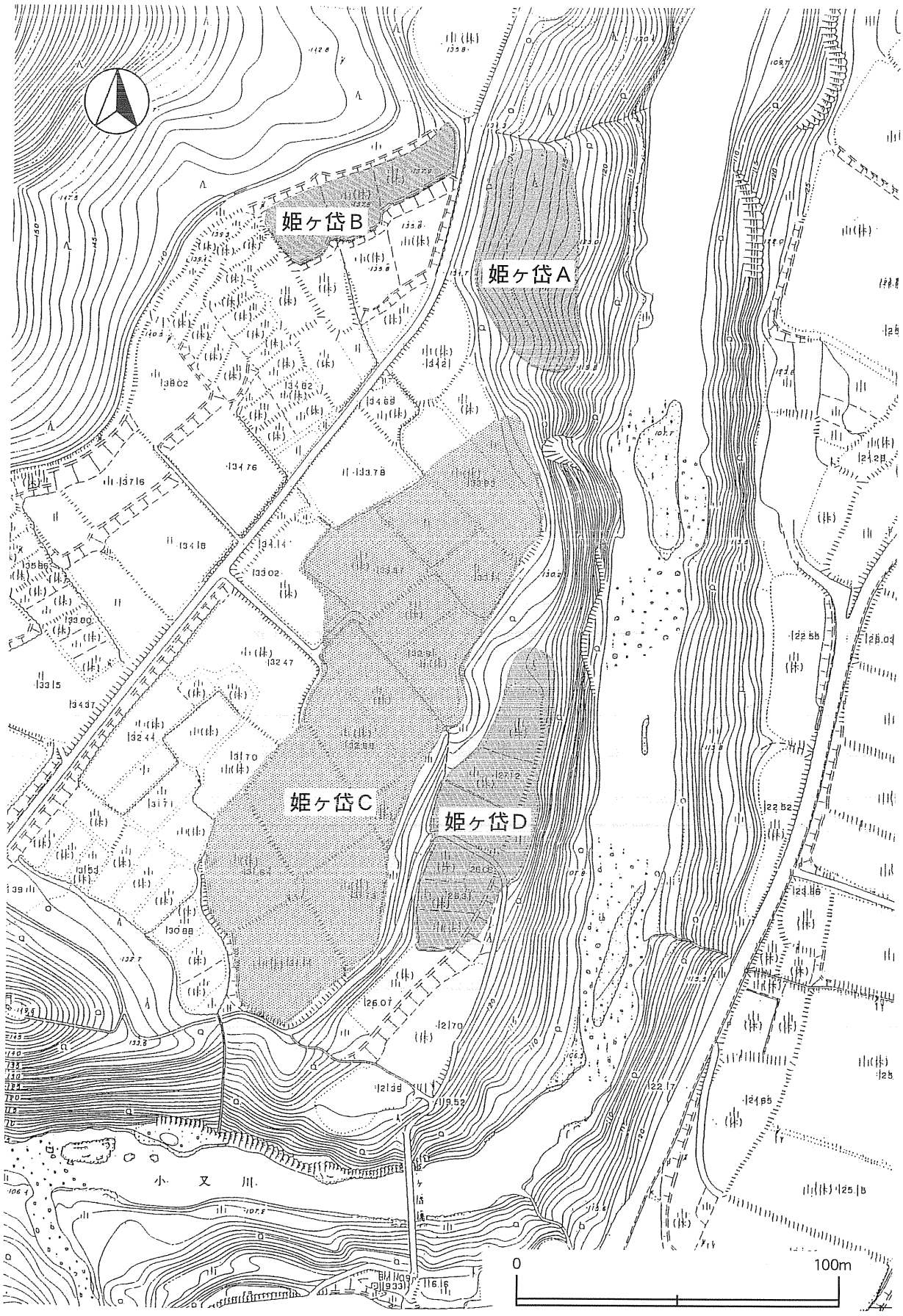
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成９）年



第２図　周辺の遺跡分布図

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	遺構・遺物
1	石の巻岱Ⅰ	鷹巣町脇神字石の巻岱60	縄文	縄文土器片(晩期)
2	石の巻岱Ⅱ	鷹巣町脇神字石の巻岱65	縄文	縄文土器片(後期)、香炉型土器
3	高森岱	鷹巣町脇神字高森岱16	縄文	縄文土器片(前期・中期)
4	藤株	鷹巣町脇神字藤株塚ノ岱43-4	縄文	竪穴住居跡、Tピット、縄文土器(前期・後期・晩期)、土製品、石器、石製品
5	からむし岱Ⅰ	鷹巣町脇神字からむし岱21	続縄文	続縄文土器片
6	からむし岱Ⅱ	鷹巣町脇神字からむし岱93	続縄文	続縄文土器片・壺形土器
7	タモノ木	鷹巣町小森字タモノ木17	縄文	縄文土器片(中期)
8	小森	鷹巣町小森字小森88-1	縄文	縄文土器片(晩期)
9	根木屋敷岱Ⅰ	鷹巣町七日市字根木屋敷岱20	古代	土師器
10	根木屋敷岱Ⅱ	鷹巣町七日市字根木屋敷岱61	縄文	縄文土器片(後期・晩期)
11	山の上	鷹巣町七日市字山の上57	縄文	縄文土器片(中期)
12	囲の内	鷹巣町七日市字囲の内80	縄文	縄文土器片(後期)
13	石倉岱	鷹巣町七日市字石倉岱3-1	縄文	縄文土器片(中期)
14	伊勢堂岱	鷹巣町七日市字伊勢堂岱8-4	縄文	縄文土器片(前期・中期・後期)
15	野尻	鷹巣町七日市字野尻8-2	縄文	縄文土器片(後期)
16	大野	合川町上道城字大野1	縄文	縄文土器片(中期)
17	向本城	森吉町米内沢字本城向屋敷3	縄文	縄文土器片、石匙
18	桐木岱A	森吉町米内沢字桐木岱41～65	縄文	縄文土器片(晩期)、石器
19	桐木岱B	森吉町米内沢字桐木岱20～23	縄文	縄文土器片、土偶
20	長野岱Ⅱ	森吉町米内沢字長野岱346-1	縄文	縄文土器片(中期)
21	長野岱Ⅰ	森吉町米内沢字長野岱56-1	縄文・弥生・古代	円形ピット、組石群、縄文土器片(前期・中期)、弥生土器片、土師器、石器
22	根小屋館	森吉町米内沢字長野岱56-1	中世	空堀
23	根小屋岱	森吉町米内沢字根小屋1-34	縄文・古代	縄文土器片(前期・中期・後期)、土師器、石器
24	冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱77-1	縄文・古代	縄文土器片(前期・中期・後期)、土師器、石器
25	狐岱	森吉町米内沢字狐岱88	縄文・古代	竪穴住居跡(縄文・古代)、土坑、配石墓、縄文土器片(前期・中期・晩期)、石器土、師器
26	山崎	森吉町米内沢字山崎57-1	縄文	土坑、配石遺構、縄文土器片
27	吉野Ⅰ	森吉町米内沢字吉野13-1	縄文・弥生	土坑、縄文土器片、弥生土器片
28	吉野Ⅱ	森吉町米内沢字吉野5-1	古代	土師器片
29	御獄	森吉町米内沢字御獄62-1	古代	土師器片
30	御獄館	森吉町米内沢字高御獄2	中世	空堀、土塁
31	寺ノ上Ⅰ	森吉町米内沢字寺ノ上12-28	縄文	縄文土器片(晩期)、石鏃、石匙
32	寺ノ上Ⅱ	森吉町米内沢字寺ノ上27-1	古代	土師器片
33	米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口99-5	中世	空堀、土塁、井戸跡
34	伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢ノ森52-57	古代	土師器片
35	浦田うるし沢	森吉町浦田字うるし沢50-1	縄文	縄文土器片、石器
36	比内道下山根	森吉町浦田字白坂山根92	縄文	縄文土器片(後期)、石器
37	塚の岱	森吉町浦田字塚の岱80	縄文	縄文土器片(晩期)、土偶、岩偶
38	白坂	森吉町浦田字白坂上岱19-22	縄文	竪穴住居跡、土坑、配石遺構、縄文土器(後期・晩期)、岩偶、石器、土製品
39	愛宕堂	森吉町浦田字稲荷沢40	縄文	縄文土器片(中期)、石器破片
40	浦田館	森吉町浦田字愛宕堂下44	中世	館跡
41	石倉坂	森吉町浦田字石倉坂3	縄文	縄文土器片(前期・中期)、石器
42	若木岱	鷹巣町七日市字若木岱9-2	縄文	縄文土器片、石器
43	焼山	森吉町阿仁前田字道行沢136-1	縄文	縄文土器片
44	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱345	縄文	縄文土器片
45	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根36	縄文	縄文土器片、石器
46	前田館	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	中世	館跡
47	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	縄文	縄文土器片(前期・中期)
48	陣場岱Ⅰ	森吉町阿仁前田字陣場岱141-1	縄文	縄文土器片(前期・中期)、石器
49	冷水沢A	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片(後期)、石器
50	冷水沢B	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片(後期)、石器
51	五味堀	森吉町五味堀字五味堀1	縄文	縄文土器片(後期)、石器
52	ボサツ堂	森吉町五味堀字堂ノ前45-46	縄文	縄文土器片(晩期)
53	五味堀高屋布	森吉町五味堀字下タ大久保岱174	縄文	縄文土器片
54	五味堀大久保岱	森吉町五味堀字大久保岱20	縄文	縄文土器片(後期)、独鈷石
55	小又小平里A	森吉町小又字涌坪74	縄文	縄文土器片(後期)、石器
56	小又小平里B	森吉町小又字上岱9	縄文	縄文土器片(後期)、石器
57	片平館	森吉町根森田字片平館3	縄文	縄文土器片(後期)、石器
58	桂の沢	森吉町根森田字桂ノ沢13	縄文	土坑、縄文土器(早期～晩期)、石器
59	仲ノ又館	森吉町根森田字仲ノ又75	中世	空堀
60	姫ヶ岱	森吉町根森田字姫ヶ岱8～15	縄文	縄文土器片、石器
61	様田	森吉町森吉字様田二重鳥131	縄文	縄文土器片、石器
62	鷲ノ瀬	森吉町森吉字鷲ノ瀬31-1	縄文	縄文土器片(前期)
63	深渡	森吉町森吉字深渡家の前	縄文	縄文土器(前期～晩期)、石組炉
64	向小滝	森吉町森吉字向小滝上段613	縄文	縄文土器片(晩期)、石器
65	風張城	阿仁町吉田字寺屋布1-7	中世	空堀、井戸跡
66	花館	森吉町五味堀字野崎1-82	中世	空堀
67	天館	森吉町五味堀字天館101	中世	館跡
68	高田城	阿仁町小淵字山ノ内65-32	中世	空堀
69	桐内沢清兵衛岱	森吉町森吉字清兵衛岱46	縄文	縄文土器片(後期・晩期)
70	小又川	森吉町小又川国有林52林班る小班	縄文	縄文土器片(後期)、石器
71	熊堂	阿仁町水無字湯口内451-1	縄文	縄文土器片(中期)、石鏃
72	上岱Ⅰ	阿仁町水無字上岱104-2	縄文	竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器(中期・後期)
73	上岱Ⅱ	阿仁町水無字上岱135-2	縄文	縄文土器片(中期)

第2表　周辺の遺跡



第３図　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

北秋田郡と仙北郡を結ぶ国道105号線を阿仁町方向から北上し、森吉町阿仁前田の森吉山県立自然公園入り口から県道比内・森吉線を太平湖方向へ約4.2km進むと根森田（仲ノ又）集落入り口、約7.3km進むと森吉スキー場入り口地点に到着する。

姫ヶ岱地区に行くには、一般的には２つのルートがある。１つは、根森田（仲ノ又）集落入り口から町道に入り、集落内を通って源五郎岳山地の南端部を越え上悪戸経由で行くルートで、根森田集落入り口からの距離は約1.7kmである。このルートは小又川右岸の町道を通る。なおこの町道は、根森田集落から上悪戸・姫ヶ岱・向様田・天津場を経由して旧森吉集落へと通じており、かつてこの地域の木材を運搬するために用いた森林軌道とほぼ一致している。もう1つのルートは、県道比内・森吉線をそのまま森吉スキー場入り口方向に行くとＴ字路があり、右折すると太平湖・森吉スキー場に至るが、これを左折して150mほど進めば「虹の橋」があり、この橋を渡って再び左折すると姫ヶ岱地区に到着する。Ｔ字路からの距離は約1.2kmである。もう一つ、姫ヶ岱地区と県道比内・森吉線は、桐内地区をすぎたあたりで「姫ヶ岱橋」で結ばれているが、この橋は車が通ることができない吊り橋であり、老朽化が進んでいる。

姫ヶ岱地区では、1996（平成８）年度に秋田県教育委員会が範囲確認調査を行い、その結果、姫ヶ岱Ａ遺跡（遺跡面積1,650m^2）、姫ヶ岱Ｂ遺跡（同850m^2）、姫ヶ岱Ｃ遺跡（同8,600m^2）、姫ヶ岱Ｄ遺跡（同2,100m^2）の４遺跡を確認した。これらの遺跡の中ほどを先述の町道が東西に横断しており、姫ヶ岱Ａ・Ｃ・Ｄの各遺跡は町道の南側に、Ｂ遺跡は北側に位置している。

姫ヶ岱Ｃ遺跡は小又川右岸の段丘上にあり、この段丘は３つの段丘面からなっているが、その内の上位段丘面東側に広がっている。小又川は、この段丘の東側を南流し、その南東端でほぼ直角に西に屈曲している。遺跡の標高はおよそ131～134mである。

なお、遺跡外となる下位段丘には表土に砂礫層が広がり、その南端には前掲の吊り橋がある。

姫ヶ岱Ｃ遺跡は、ほぼ全域が休耕田となっており、1997（平成９）年度は、遺跡総面積8,600m^{2}のうち、南側の2,000m^{2}を調査した。

第２節　調査の方法

１　野外調査

調査は、グリッド法で行った（第５図）。対象面積全域にグリッドを設定するため、遺跡の西側にある建設省打設の３級基準点№１・№２を用いて、遺跡中心付近に中心杭を設定した。この中心杭を原点とする、国家座標第Ｘ系の南北方向に南北基準線Ｙ軸を設定した。この基準線と直交して、原点の基準杭を通る線を東西基準線Ｘ軸とし、これらＸ・Ｙ両軸に４ｍ×４ｍ方眼メッシュを割り付けた。原点をＭＡ50とし、東西方向には、Ｘ軸上を西に４ｍ進む毎にＭＢ、ＭＣ、ＭＤ・・・と正順に、東

に4m進む毎にＬＴ、ＬＳ、ＬＲ・・・と逆順に各々Ａ～Ｔまでのアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Ｙ軸を北に４ｍ進む毎に51、52、53・・・、南に４ｍ進む毎に49、48、47・・・と増減する２桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅の杭を通るＸ軸とＹ軸の組み合わせで、ＭＡ50・ＭＢ51・ＭＣ52・・・のように呼ぶこととした。

遺構はプラン検出順に連番で遺構番号をつけた。原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、２または４分割法による精査を行った。

遺物はグリッド単位で取り上げ、グリッド名または遺構名、取り上げた年月日を記入した耐水性荷札を添付した。

平面図及び断面図は、原則として1/20、細部状況を表すために適宜1/10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図にあたっては、グリッド杭と間尺と組み合わせた手実測によった。断面図には土色・かたさ・しまり・粘性・混入物を注記している。必要に応じてエレベーション図も作成した。

発掘調査における写真撮影は、遺跡や遺構・遺物を対象とする地上撮影を行った。写真は、35㎜判カメラにモノクロ、カラーリバーサル（スライド用）フィルムを装着し、必要に応じネガカラーも加えている。

２　室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第１原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせた図を第２原図とした。第２原図作成後、これをトレースした。

遺物は、洗浄・注記の後、報告書に掲載する遺物の選別を行い、その後に基本的に原寸で実測図を作成し、報告書に掲載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図には、スケールを入れて示してある。また、土器片などは拓影図の作成をあわせて行い、これらの作業後に写真撮影を行った。

第３節　調査経過

姫ヶ岱Ｃ遺跡の発掘調査は、同年行われた姫ヶ岱Ｄ遺跡の発掘調査終了後の1997（平成９）年８月25日から行われた。

8月25日　姫ヶ岱Ｃ遺跡の発掘作業開始。調査区北側から粗掘作業開始。

8月28日　京極森吉山ダム工事事務所長他２名来跡。

8月29日　冨樫文化課長、同課武藤学芸主事、森吉山ダム工事事務所工事課長ら来跡。

9月　8日　姫ヶ岱Ｃ遺跡の調査区東側の粗掘作業開始。

9月12日　ＳＫ03、ＳＫ04の精査を終えた。

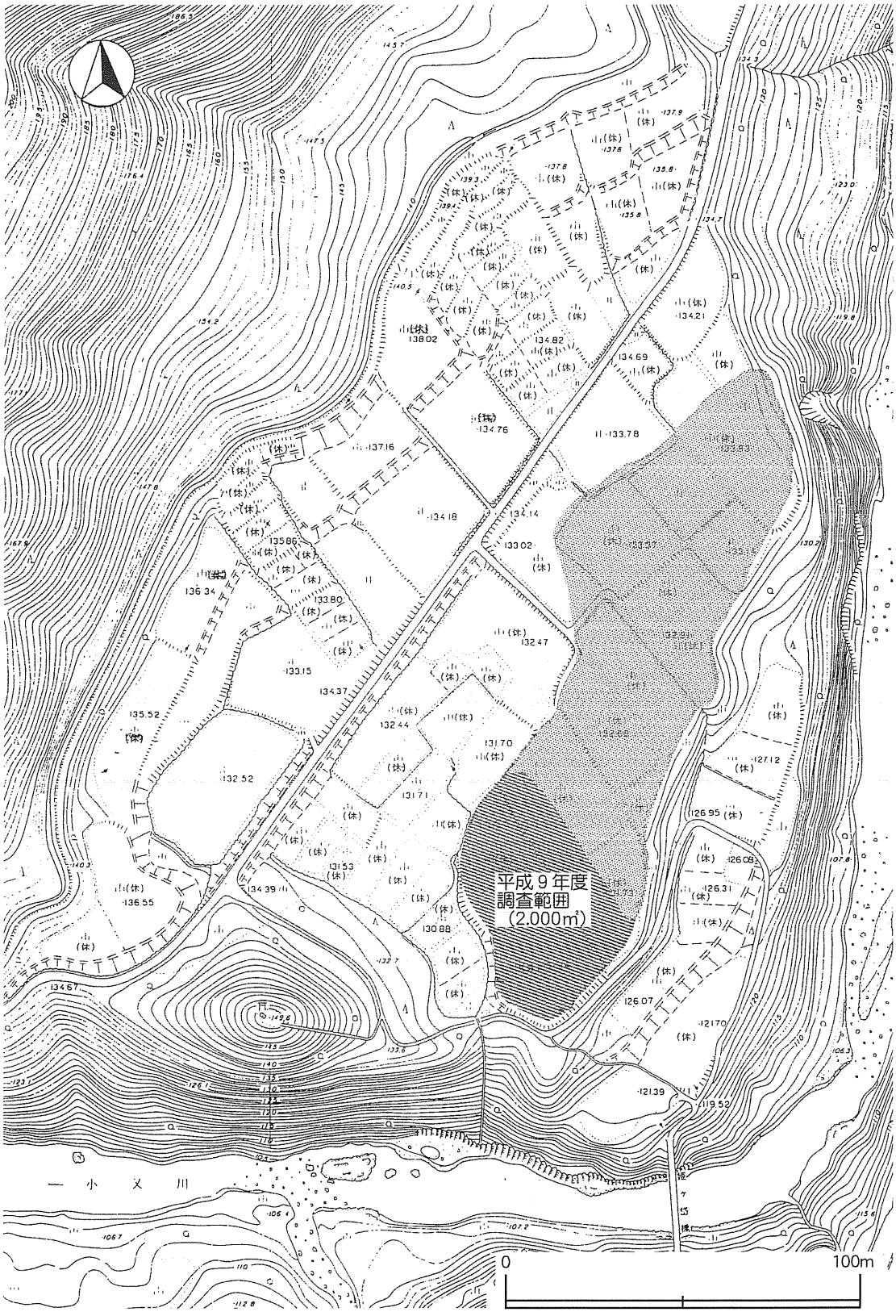
9月16日　調査区西部・南部の粗掘作業開始。

9月24日　ＭＥ38グリッドで半月形の精巧な石槍が出土した。

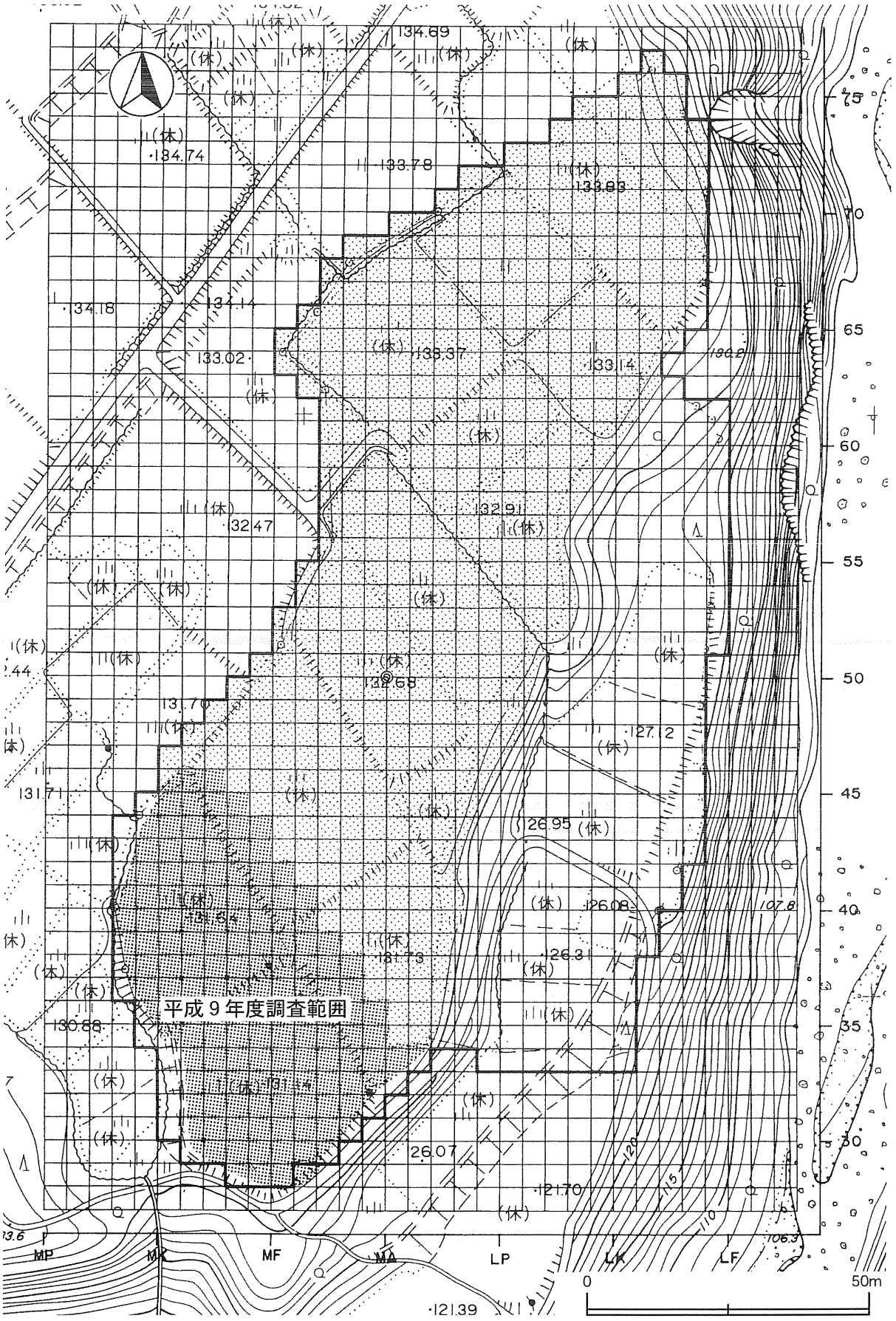
10月　7日　ＳＫ14までの精査を終えた。ＳＫ15、ＳＫ16を検出した。

10月　9日　ＳＫ15、ＳＫ16の精査を終え、姫ヶ岱Ｃ遺跡の発掘調査を終了した。来年度調査区（当初予定）との境界より検出された炉２基、土坑１基については、森吉山ダム工事事務所

了解のもと、シートをかぶせて保護した。



第４図　遺跡調査範囲

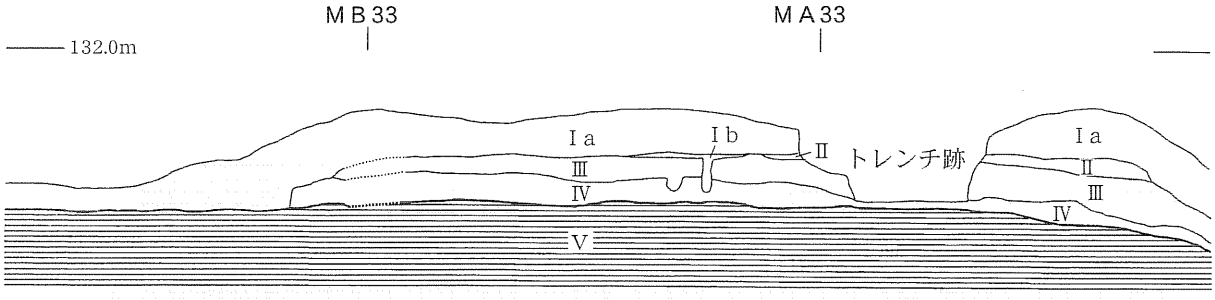


第５図　グリッド設定図

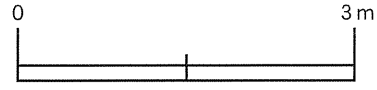
第４章　調査の記録

第１節　基本層位

姫ヶ岱Ｃ遺跡の発掘調査範囲における堆積土は、５層に大別した。



Ⅰ層	Ⅰａ層　黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	表土（自然層位）
	Ⅰｂ層　黒褐色土	(10ＹＲ 3/2)	表土（10ＹＲ3/1）混じる。（旧耕作土）
Ⅱ層	黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	(盛土)
Ⅲ層	黒色土	(10ＹＲ 2/1)	(遺物包含層)
Ⅳ層	にぶい黄褐色土	(10ＹＲ 4/3)	(漸移層)
Ⅴ層	にぶい黄褐色土	(10ＹＲ 4/3)	(地山層)



第６図　基本土層図

Ⅰ層は表土であり、さらに２層に分けられる。Ⅰａ層は耕作の影響を受けていない表土で、層厚は0.2～0.6mであった。上部約0.1mは、草木根が密であった。Ⅰｂ層は、かつての水田における耕作土がそのまま表土となっているもので、厚さは0.02～0.34mであった。この層には、赤褐色の粒（酸化鉄）が多く含まれていた。土層断面図中の落ち込みは杭の跡で、そこに、Ⅰｂの土が入り込んでいるものである。

Ⅱ層は、にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/３）の小ブロック（径５㎜前後）を全体にやや多く含む。ややかたくしまった層で、層の厚さは0.02～0.16mであった。この層は水田耕作時の盛土である。

Ⅲ層は遺物包含層で、層の厚さは0.12～0.3mであった。

Ⅳ層は漸移層で、褐色土（10ＹＲ４/６）が混入していた。

Ⅴ層は地山で、粘性がありややしまりが強い。隣接する姫ヶ岱Ｄ遺跡の地山とは性質が異なっていた。

本遺跡は、水田化に際して削平を受けていたので、所によってはⅢ・Ⅳ層の残存している部分が少なく、削平をまぬがれた部分（もともと標高の低いところや、畦など）のみで残存している。

第２節　検出遺構と出土遺物

今回調査した範囲で検出した遺構は、土坑11、石囲炉１、焼土遺構２の計14遺構であった。住居跡は確認されなかった。

遺構内からの出土遺物は少なく、土器片・剥片が中心であった。

１　土坑

土坑は、全部で13基確認したが、ＳＫ06、ＳＫ15は精査の結果、遺構から除外されたので欠番となっている。

ＳＫ02土坑（第８図、図版１）

［位　　置］　ＭＥ25グリッドの中央部に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　不整円形で、規模は長軸1.44m、短軸1.32mである。

［壁・底面］　確認面からの深さは約0.25mで、壁は底面に向かって緩やかに傾斜している。底面はほぼ平坦で、西側では径0.2～0.3mの人頭大の礫が露出している。

［出土遺物］　埋土中から剥片と、土器片が計39点出土した。土器片は細片が多く、このうち、比較的大きい７点を掲載した（第12図、図版６）。１と２はＲＬ縄文が施されており、表面には火をうけた痕が残っている。これらは同一個体と考えられる。３～７は深鉢形土器の体部である。

ＳＫ03土坑（第８図、図版１）

［位　　置］　ＬＴ33グリッド北側に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　最大径0.79mのほぼ円形である。

［壁・底面］　確認面からの深さは0.35mで、壁は底面に向かって緩やかに傾斜している。底面の中央

部は周りより0.1mほど低く掘り込まれている。西側には倒木痕がある。

［出土遺物］　埋土中から土器片２点が出土した（第12図、図版６）。１は、沈線の上位には縄文が、下位には磨り消し縄文が施される。２は表面が摩滅していて文様は見えない。

［そ の 他］　東隣してＳＫ04がある。

ＳＫ04土坑（第８図、図版２）

［位　　置］　ＬＴ33グリッドの北東隅に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　長軸1.36m、短軸0.99mの東西に長い楕円形である。

［壁・底面］　確認面から底面までの深さは0.27mで、壁は底面に向かって緩やかに傾斜している。

［出土遺物］　埋土中から縄文土器の破片が1点出土した（第12図、図版6）。表面は摩滅しているが、わずかに縄文が確認できる。

［そ の 他］　西隣してＳＫ03がある。

ＳＫ05土坑（第８図、図版２）

［位　　置］　ＭＤ36グリッドの南西隅に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　東側がとがった形で、長軸1.02m、短軸0.76mである。

［壁・底面］　確認面から底面までの深さは0.27mある。東側の突出した底面は約0.1mと浅く、そこから土坑底面までは階段状をなしている。それ以外の壁面は平坦で、漏斗状をなしている。

［出土遺物］　土器・石器はなかったが、長さ42cm幅約10cmの炭化材が出土した。

ＳＫ07土坑（第９図、図版２）

［位　　置］　ＭＣ35グリッドに位置する。

［確　　認］　粗掘終了後、ＭＣ35グリッド杭の断面で、漸移層から地山面の間の掘り込みを確認した。

［平 面 形］　粗掘終了後に検出されたため、杭の部分の約１/４しか残っていない。残存部分の形状から、直径約0.9m程の円形であったと考えられる。

［壁・底面］　確認面からの深さは0.26mで、底部と思われる部分に向かって、緩やかに傾斜している。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫ08土坑（第９図、図版３）

［位　　置］　ＭＡ33グリッドの北東側に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　略円形で、直径は約1.2mである。

［壁・底面］　確認面から底面までの深さは0.12mである。底面はほぼ平坦で、壁は底面より外に向かって急角度で立ち上がる。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫ11土坑（第９図、図版３）

［位　　置］　ＭＤ31グリッドに位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　南北に長い楕円形で、規模は長軸2.06m、短軸1.63mである。

［壁・底面］　壁は、南北方向で底面に向かって急な落ち込みを呈しているが、東西方向では底面の中心に向かって緩やかに傾斜している。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫ12土坑（第10図、図版３）

［位　　置］　ＭＢ32グリッドの東端に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　直径約0.4mの円形を呈している。

［壁・底面］　壁は、土坑中心に向かってやや急な傾斜となっている。底面は、緩やかなカーブを描いている。

［出土遺物］　縄文時代後期前葉の十腰内Ｉ群期のものと考えられる壺型土器が出土した（第12図、図版6）。体部上位は水平に切断されており、蓋として利用されたと考えられる。切断部分は、焼成前に切断されたもので、切断された部分には、斜めの切れ込みがある。また、土器の表面には赤色顔料が施され、祭祀に用いられた可能性がある。

ＳＫ13土坑（第10図、図版４）

［位　　置］　ＭＨ29グリッドとＭＨ30グリッドの間に位置し、南西部でＳＫ16と切り合っていた。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　最大径1.8mの円形である。

［壁・底面］　確認面から底部までの深さは約0.44mである。北側では、底面に向かって緩やかに傾斜しているが、南側ではやや急な落ち込みとなっている。底面はほぼ平坦で、その北側は倒木痕によって攪乱されている。

［出土遺物］　埋土中から円形の掻器（第12図、図版６）１点と剥片が３点出土した。

ＳＫ14土坑（第10図、図版４）

［位　　置］　ＭＣ31グリッドの東側に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　直径約1.15mの円形である。

［壁・底面］　確認面からの深さは約0.25mである。壁はほぼ垂直に落ち込んでおり、底面は平坦であるが、土坑の北側に、直径0.2m、深さ0.16mの落ち込みがある。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫ16土坑（第10図、図版４）

［位　　置］　ＭＨ29グリッドに位置し、北側でＳＫ13と切り合っていた。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　最大径1.6mの不整円形を呈している。

［壁・底面］　壁は、南側で底面にむかって急激な落ち込みを確認できるが、北側はＳＫ13構築時に

壊されており確認することはできない。底面は平坦で、確認面からの深さは0.34mである。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

２　石囲炉

石囲炉は、１基確認した。

ＳＱ10石囲炉（第11図、図版５）

［位　　置］　ＭＢ32グリッドの南東側に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　石囲の部分の直径は約0.5mで、南東部が前庭部の方向に向かって開いている、コの字型になっている。石囲炉と前庭部から形成されている複式炉だと考えられる。前庭部は、２つの掘り込みがみられ、石囲炉側から直径0.45mと直径0.75mの掘り込みが切り合った形で確認された。

［壁・底面］　前庭部の掘り込みの壁は緩やかで、底部は緩やかな弧を描いている。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

［そ の 他］　炉の確認により住居跡ではないかと考え、住居の壁・柱穴を探したが確認できなかった。

３　焼土遺構

焼土遺構は、２基確認した。

ＳＮ01焼土遺構（第11図、図版５）

［位　　置］　ＭＧ42グリッドとＭＧ43グリッドの間に位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［形　　態］　直径約0.45mの不整円形で南側が少しかけた形をしていた。焼土の厚さは0.06mであった。焼土の西側には、倒木痕と思われる攪乱が見られた。

ＳＮ09焼土遺構（第11図、図版５）

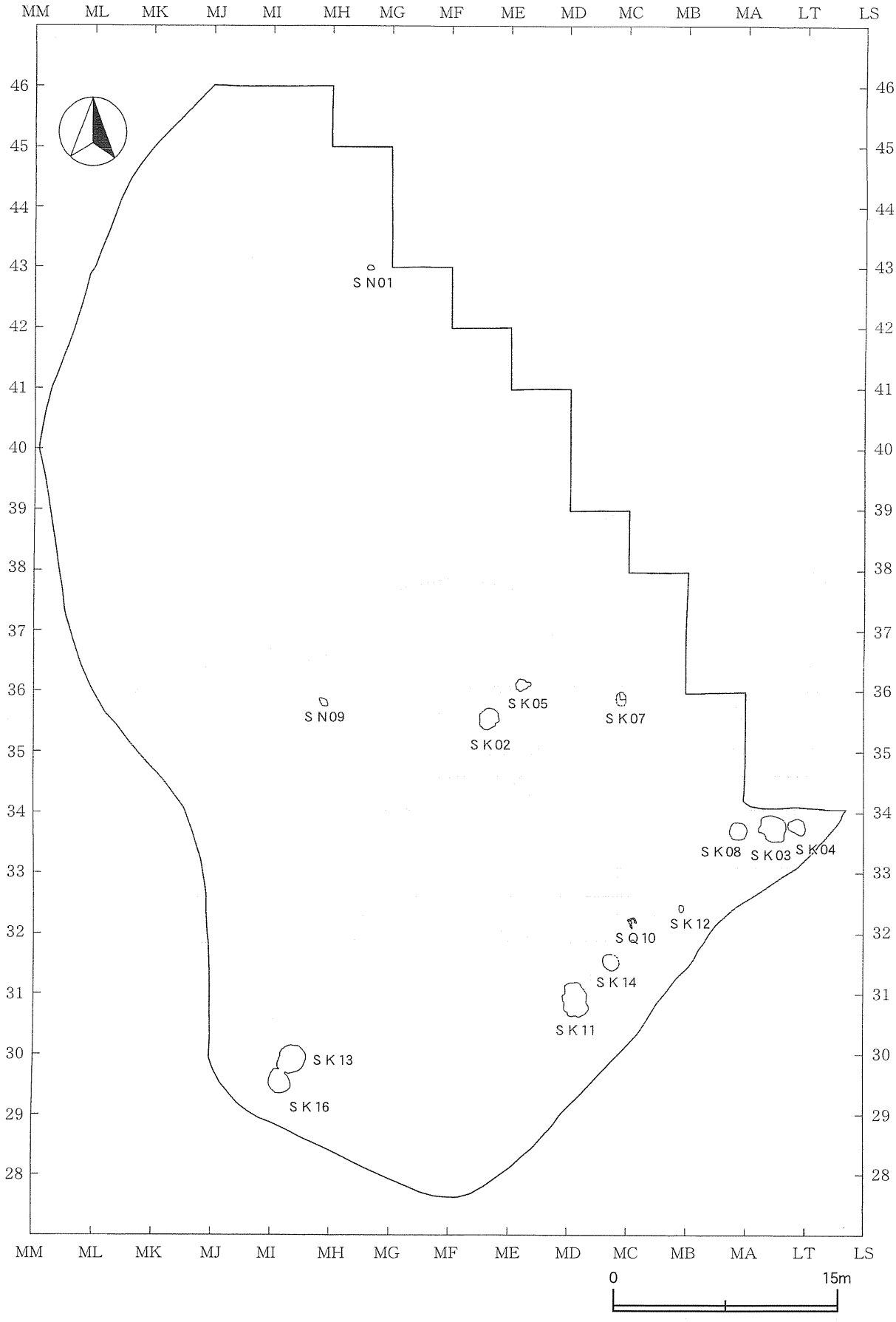
［位　　置］　ＭＨ35グリッド北東隅に位置する。

［確　　認］　漸移層から地山面の間で確認した。

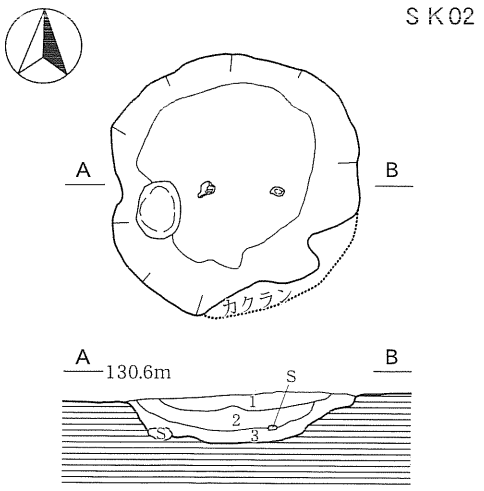
［形　　態］　焼土の厚さは0.07～0.1mである。この遺構は、炭化物を含む土の範囲を入れるとほぼ円形で、長軸0.74m、短軸0.45mの広がりをもっている。確認面から地山までの深さは0.34mである。

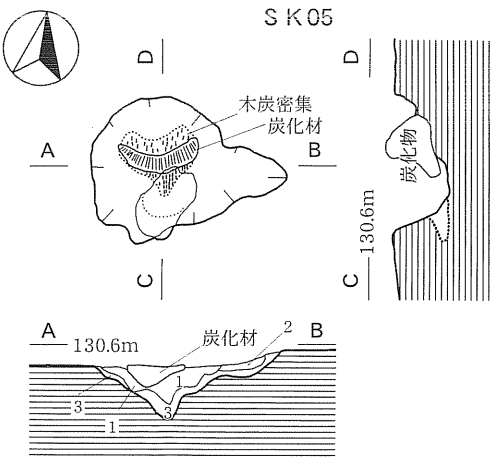
第３節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文時代の土器と石器のみで、同時代の土製品や石製品は皆無である。また、縄文時代以外の遺物も出土していない。


MM
ML
MK
MJ
MI
MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
SN01
SN09
SK05
SK02
SK07
SK08
SK03
SK04
SK12
SQ10
SK14
SK11
SK13
SK16
0
15m

第７図　遺構配置図



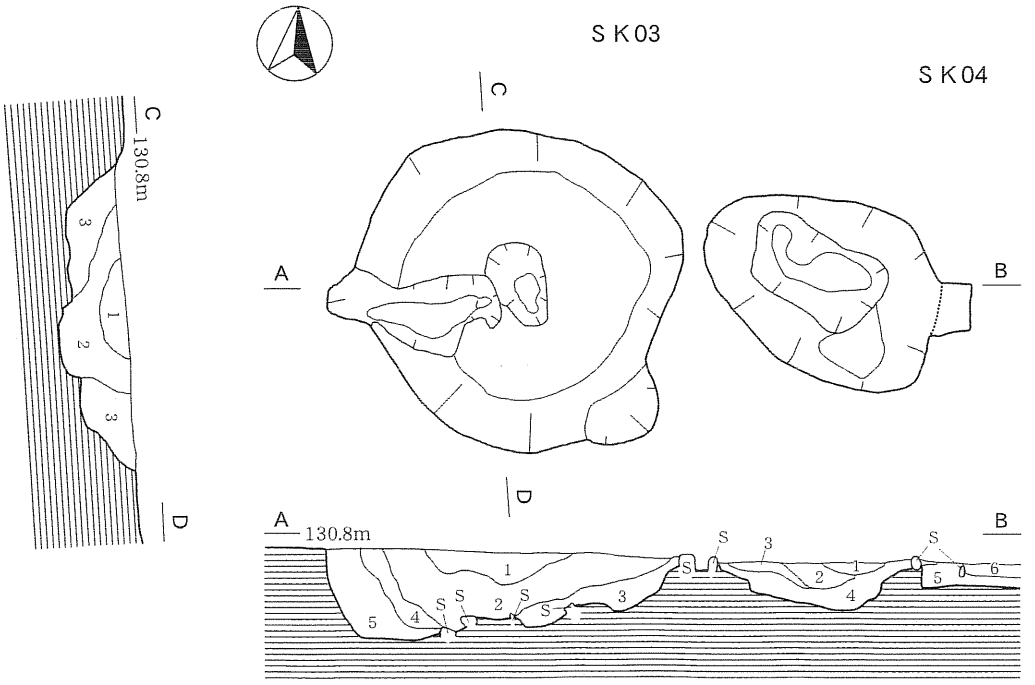


ＳＫ02

1	黒色土	(10ＹＲ 1.7/1)	シルト　しまりあり　炭化物を含む
2	黒褐色土	(10ＹＲ 2/2)	シルト　固くしまっている　地山粒を含む
3	褐色土	(10ＹＲ 4/4)	粘土　固い

ＳＫ05

1	暗褐色土	(10ＹＲ 3/4)	シルト　炭化材を囲む形で存在　ややわらかい
2	にぶい黄褐色土	(10ＹＲ 4/3)	粘土質　炭化材（細粒）を若干含む　地山粒を含む
3	褐色土	(10ＹＲ 4/6)	シルト　粘土質



ＳＫ03

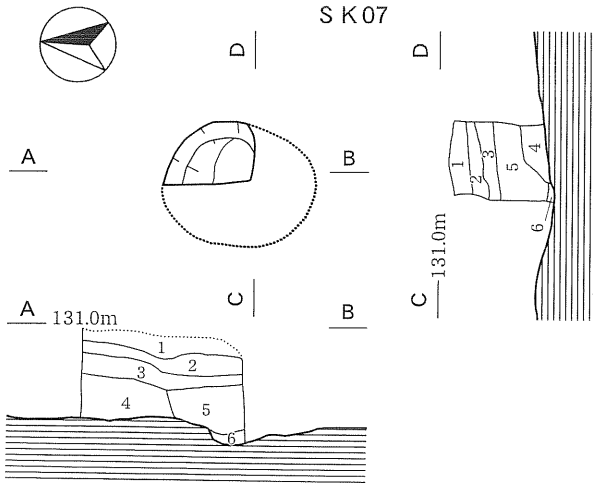
1	黒色土	(10ＹＲ 2/1)	黒褐色土（10ＹＲ 3/1）をまだら状に多く含む　炭化物（径5㎜程度）をやや多く含む
2	黒色土	(10ＹＲ 2/1)	炭化物（径5㎜程度）を少量含む　地山ブロック（径1cm程度）をまばらに少量含む
3	黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	地山ブロック（径2～10㎜）をまばらに少量含む　ほかの層に比べてしまっている
4	黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	地山ブロック（径1cm程度）を少量含む（3より少ない）
5	黒褐色土	(10ＹＲ 3/2)	黄褐色土（10ＹＲ 5/6）を含む　遺構外に細長くのびているため木の根の痕と思われる

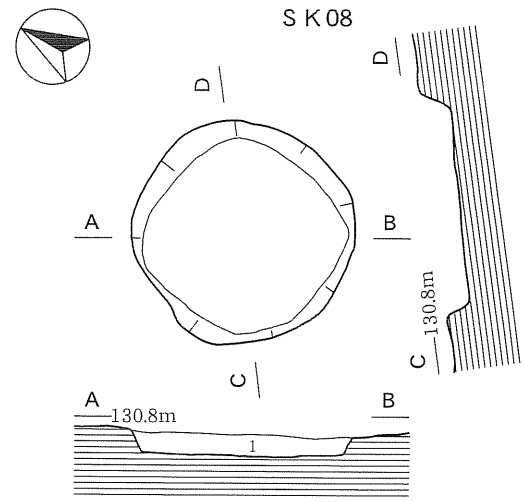
ＳＫ04

1	黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	黒褐色土（10ＹＲ 3/2）をまだら状に多く含む　炭化物（径5～10㎜）をやや多く含む
2	黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	黒褐色土（10ＹＲ 3/2）軟質の砂岩礫（径2～3cm）を少量含む　炭化物（径5～10㎜）を少量含む
3	黒色土	(10ＹＲ 2/1)	
4	黒褐色土	(10ＹＲ 3/2)	黒褐色土（10ＹＲ 3/1）を含む
5	暗褐色土	(10ＹＲ 3/3)	
6	黒褐色土	(10ＹＲ 3/2)	

0　1m

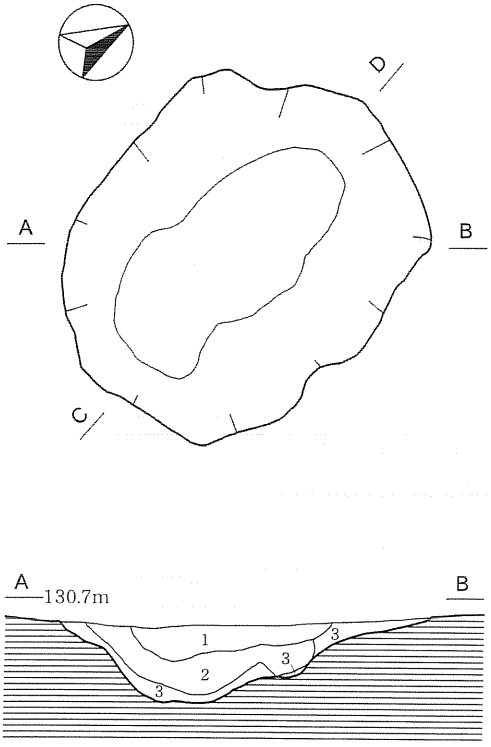
第８図　ＳＫ02・ＳＫ03・ＳＫ04・ＳＫ05



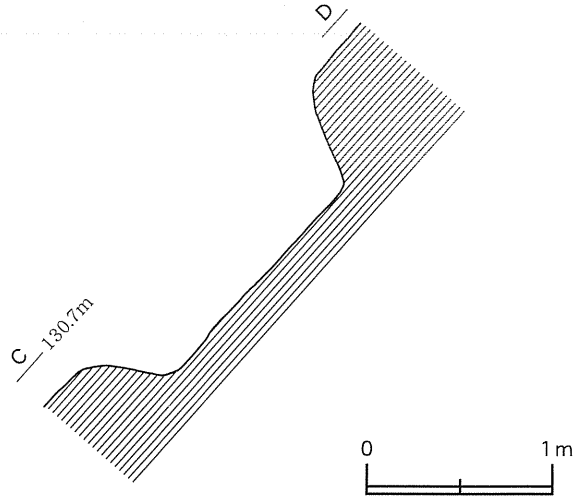


ＳＫ07
1　黒色土　(10ＹＲ 2/1)
2　黒褐色土 (10ＹＲ 3/1)　粗砂を少量含む
3　黒色土　(10ＹＲ 2/1)　炭化物（径5㎜程度）をやや多く含む
4　黒褐色土 (10ＹＲ 3/1)　にぶい黄褐色土（10ＹＲ 4/3）を含む
5　黒褐色土 (10ＹＲ 3/1)　黒色土（10ＹＲ 2/1）を多く含む
炭化物（径1cm程度）を部分的にやや多く含む
黄褐色粒・ブロックをわずかに含む
6　褐色土　(10ＹＲ 4/4)　黒褐色土（10ＹＲ 3/2）を含む

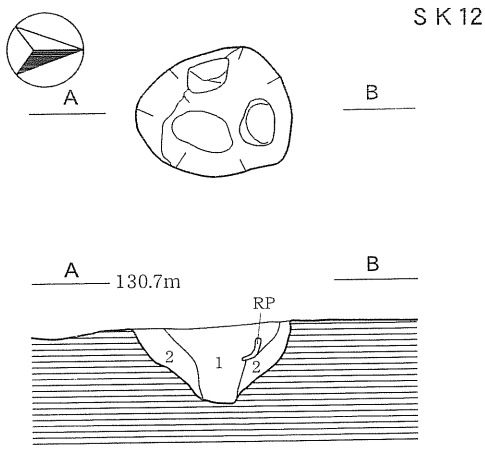
ＳＫ08
1　黒褐色土　(10ＹＲ 3/2)　にぶい黄褐色土（10ＹＲ 5/4）のブロック
（径1cm程度）をやや多く含む

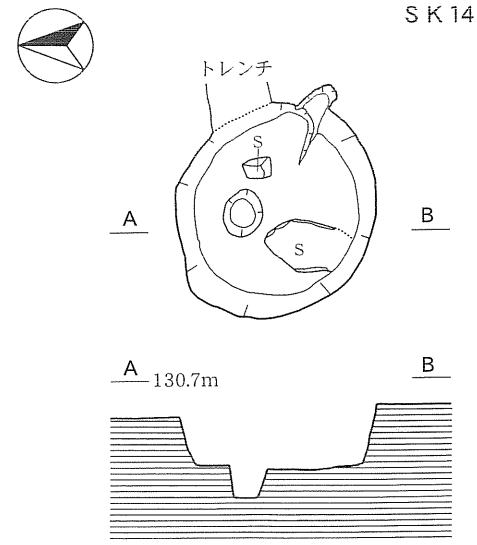


ＳＫ11
1　暗褐色土 (10ＹＲ 3/4)　シルト　しまりあり　炭化物細粒を含む
2　褐色土　(10ＹＲ 4/4)　シルト　ややわらかい　地山ブロックを含む
3　黄褐色土 (10ＹＲ 5/6)　地山　粘土　粘性あり　しまりあり



第９図　ＳＫ07・ＳＫ08・ＳＫ11



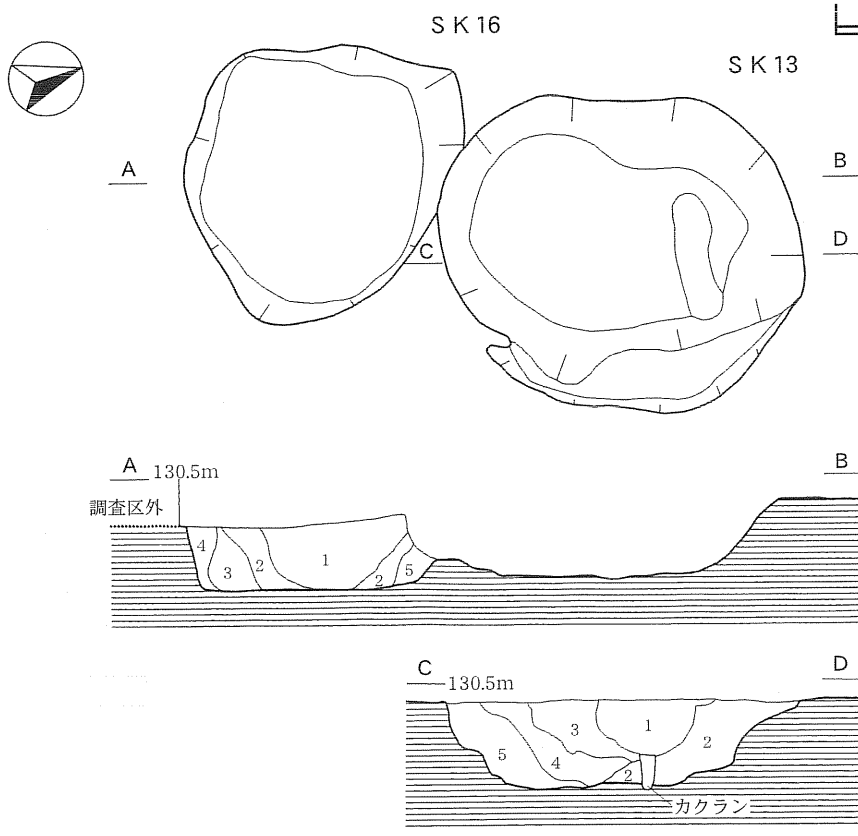


ＳＫ12
1　にぶい黄褐色土（10ＹＲ 4/3）　黄褐色土（10ＹＲ 5/6）のブロック（径2～3㎜）をやや多く含む
2　にぶい黄褐色土（10ＹＲ 4/3）　炭化物（径5㎜程度）を少量含む

ＳＫ14
1　黒褐色土（10ＹＲ 3/1）　明黄褐色土（10ＹＲ 6/6）のブロック（径5㎜程度）を少量含む

0　50cm

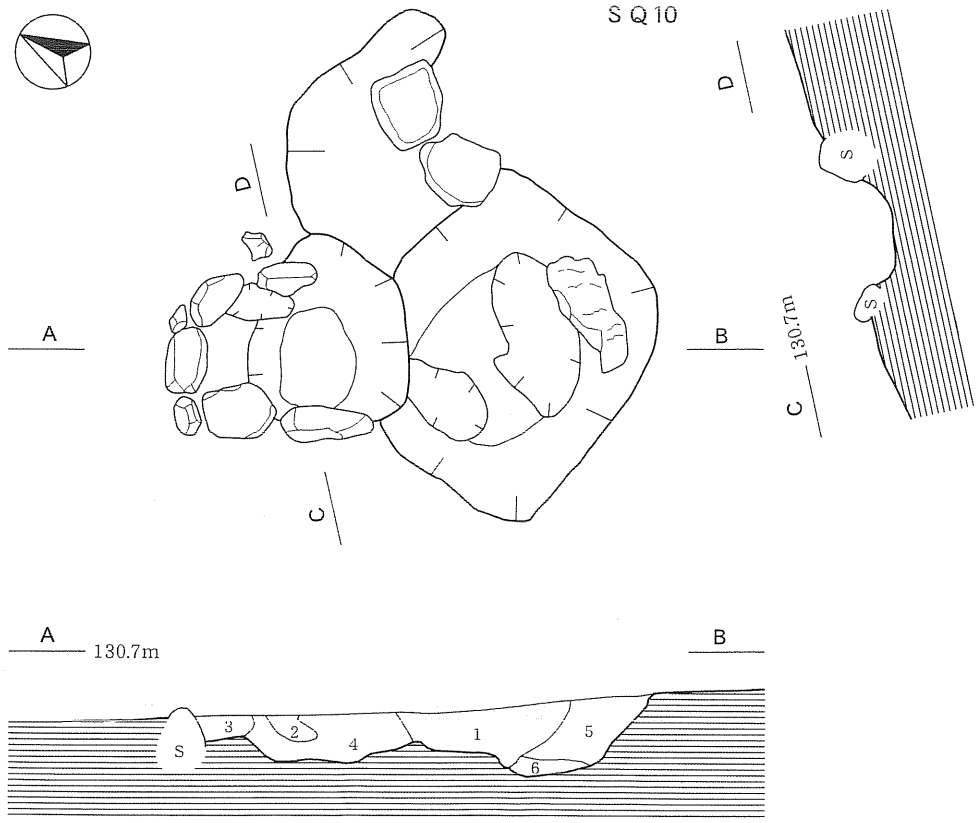
0　1m



ＳＫ13・ＳＫ16
1　黒色土　（10ＹＲ 2/1）　黄褐色土（10ＹＲ 5/6）のブロック（径5㎜程度）を少量含む　炭化物（径5㎜程度）を少量含む
2　にぶい黄褐色土（10ＹＲ 4/3）　黒褐色土を含む　黄褐色土（10ＹＲ 5/6）のブロック（径1cm程度）をわずかに含む
3　にぶい黄褐色土（10ＹＲ 4/3）　黄褐色土（10ＹＲ 5/6）のブロックをまだら状にやや多く含む
4　黄褐色土　（10ＹＲ 5/6）　褐色土（10ＹＲ 4/6）を含む　炭化物（径1cm程度）をわずかに含む
5　にぶい黄褐色土（10ＹＲ 4/3）　明黄褐色土（10ＹＲ 6/6）を含む　炭化物（径1cm程度）をわずかに含む

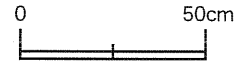
0　1m

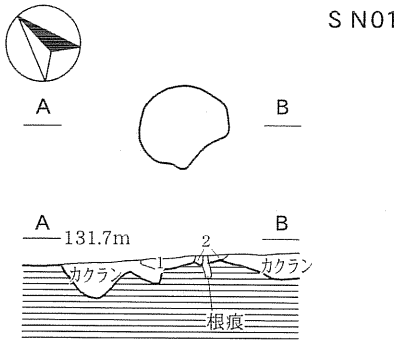
第10図　ＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ14・ＳＫ16



ＳＱ10

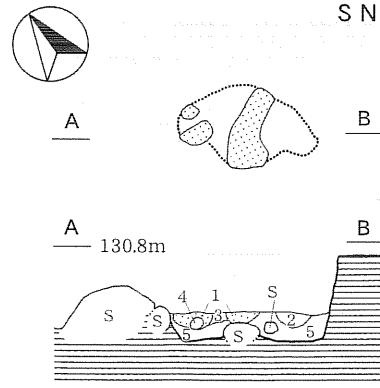
1	黒褐色土	(10ＹＲ 3/2)	にぶい黄褐色土（10ＹＲ 5/4）のブロック（径2㎜程度）を少量含む
2	黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	黒色土をわずかに含む
3	黒褐色土	(10ＹＲ 3/2)	赤褐色土（5ＹＲ 4/6）ブロック（径5㎜程度）とにぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4）のブロック（径2～5㎜）を少量含む
4	黒褐色土	(10ＹＲ 3/2)	にぶい黄褐色土（10ＹＲ 5/4）のブロック（径2～5㎜）をやや多く含む　炭化物（径5㎜前後）を少量含む
5	にぶい黄褐色土	(10ＹＲ 4/3)	にぶい黄褐色土（10ＹＲ 5/4）ブロック（径5㎜程度）を少量含む
6	橙色土	(10ＹＲ 6/6)	





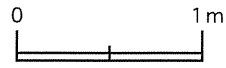
ＳＮ01

1	明赤褐色土	(10ＹＲ 5/6)	焼土
2	にぶい黄褐色土	(10ＹＲ 4/3)	明赤褐色土をすじ状に少量含む

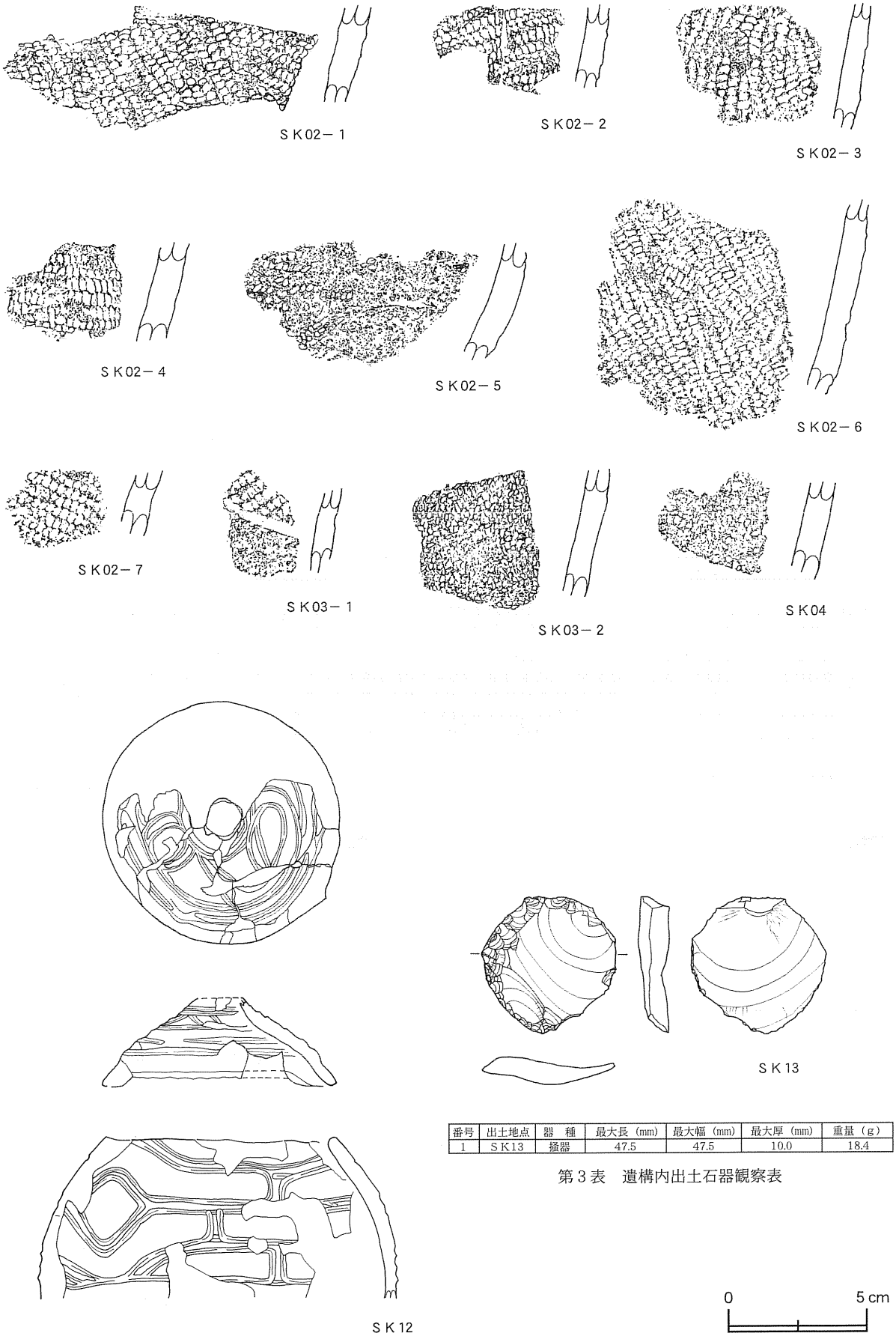


ＳＮ09

1	赤褐色土	(5ＹＲ 4/6)	焼土　粗～中粒の砂をわずかに含む 炭化物（径5㎜程度）を少量含む
2	黒褐色土	(10ＹＲ 3/1)	焼土　褐色土（7.5ＹＲ 4/3）＝焼土を含む １層同様炭化物を少量含む
3	黒褐色土	(10ＹＲ 2/2)	赤褐色土（5ＹＲ 4/8）のブロック（径3㎜）をやや多く含む
4	明赤褐色土	(10ＹＲ 5/6)	粗～中粒の砂をわずかに含む
5	黒色土	(10ＹＲ 2/1)	不純物をほとんど含まないきめ細かい土



第11図　ＳＱ10・ＳＮ01・ＳＮ09



番号	出土地点	器　種	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）
1	ＳＫ13	掻器	47.5	47.5	10.0	18.4

第３表　遺構内出土石器観察表

第12図　遺構内出土遺物

１　土器

遺構外から出土した土器の量はあまり多くない。時期的には、中期から晩期の所産であるが、中期・後期の土器がほとんどで、晩期は１点のみである。以下、各時期毎に述べる。

①縄文時代中期の土器（1～13）（第13図、図版７）

１～５には、いずれも棒状工具による刺突文が列状に施され、１・３・４には隆帯上にも押圧縄文が施されている。５の口縁には粘土紐が貼付されている。６では、縄文原体に平行する押圧文が上下に付され、それらの間に半截竹管による刺突文が施されている。７は、口縁部が折り曲げられたような二重口縁である。口縁上には粘土紐が波状に貼付され、斜行縄文が施されている。これらは円筒上層ｃ式に含まれる。８・９は同一個体と考えられ、表面に、斜行縄文を施文した後、平行沈線文が施されている。これらは大木８ｂ式と思われる。10は、平行する沈線文の内部に細かな縄文が充填されている。11～13も沈線文の施された土器で、11は曲線を描く沈線文の内部に縄文が施されている。これらは大木10式に含まれる。

②縄文時代後期の土器（14～25）（第13～15図、図版７～９）

14～16は、器面が丁寧に磨かれた同一個体で、14・15は口縁部である。口縁は山形状の突起を持ち、くの字に屈曲する頸部には平行沈線文が施されている。14では、幅約５㎜の太い沈線で左右対称の曲線文を描いている。これらは、十腰内Ｉ群期前半の壺形土器である。17～19も同一個体で、いずれの土器片にも幅約１㎜の細い沈線が施文されている。20は口縁部で、内面には煤状炭化物が付着しており、外面には蕨状の沈線文が施されている。これらは十腰内Ｉ群期前半の深鉢形土器である。21は深鉢形土器の口縁部で、口縁には粘土紐が貼付されている。また表面には素麺状の細い粘土紐が貼付されて文様を形成している。この土器片は、十腰内Ｖ群期の深鉢形土器である。22・23は同一個体の鉢形土器で、22は口縁部である。口唇部には斜行縄文が全面に施されており、口縁部は内側にかなり湾曲している。24は口縁部に複数の波状突起とその中間に小突起が付く深鉢形土器と考えられる。口唇部には斜めの押圧縄文を密に施している。表面には全面にＲＬ縄文が施されている。25は口縁部に粘土紐を貼り付けた二重口縁で、その上からＬＲ縄文を施している。

③縄文時代晩期の土器（26）（第14図、図版８）

26は、鉢形土器の口縁部である。表面は無文であるが丁寧に整えられている。また直径５㎜の穿孔がある。

④時期不明の土器（27～32）（第14図、図版８）

27・28は同一個体で、撚糸文が施されている。29は深鉢形土器の口縁部で、口唇部から２㎝程までは無文である。表面には煤状炭化物が付着している。30は胎土に繊維を含み、土器表面には焼成の際に繊維が燃えた跡が見られる。31は、縄文を施した後に、草の茎のようなもので施文したものである。32は隆帯部分のみで、刺突文が見られる。

２　石器

遺構外から出土した石器には、石槍・石匙・石箆・掻器・削器・トランシェ様石器・打製石斧・磨製石斧がある。

石槍（Ｓ１・Ｓ２）（第16図、図版９）

石槍は２点出土した。Ｓ１は、正面の左側縁が大きく膨らんだ左右非対称形である。両面とも広い

剥離調整が行われた後、両側縁に細かい調整が加えられている。先端は尖っているが、基部は粗い調整のままである。Ｓ２は一方の側縁が直線的で反対側が弧状になる、典型的な半月形の形状を呈する。両面の側縁には、細かな調整がほぼ全周するように施される。非常に薄く精巧な作りである。

石匙（Ｓ３～Ｓ９）（第16図、図版９）

石匙は７点出土した。そのうち６点（Ｓ３～Ｓ８）が縦型石匙で、１点（Ｓ９）が横型石匙である。Ｓ３・Ｓ４は、つまみ部の内外に調整を施し、主要剥離面をそのまま残している。Ｓ３は、表面の両側縁と刃部に調整を施すが、Ｓ４には見られない。どちらも、表面つまみ部の反対側に自然面を持つ。Ｓ３・Ｓ４のつまみ部には、アスファルトが付着している。Ｓ５は、つまみ部がとくに大きな縦型石匙である。下部が欠損しており、その割れ口を再加工している。Ｓ９は横型石匙で、主要剥離面を裏側に残し、表側の周縁全体を加工して刃をつけている。

石篦（Ｓ10～Ｓ17）（第17・18図、図版９）

石篦は８点出土した。本遺跡の中で最も出土数の多い器種である。Ｓ10は、両面とも二次調整が行われていて、刃部は急角度につくられている。全体的に肉厚である。Ｓ11は、主要剥離面が甲高な横長剥片を素材にしている。両面とも両側面が粗い剥離によって整形され、刃部に調整がない。Ｓ12とＳ13は、ともに主要剥離面を残し、周縁部を細かく調整している。Ｓ12の表面には自然面が残り、基部は剥落している。Ｓ14は下の刃の部分が欠損している。Ｓ15～Ｓ17は、調整の粗い石篦である。

掻器（Ｓ18～Ｓ24）（第18図、図版９・10）

掻器は７点出土し、石篦に次いで出土数が多い器種である。Ｓ18～Ｓ20は、いずれも主要剥離面をそのまま残し、その裏面の周縁部を二次加工して刃をつけている。Ｓ21では、Ｓ18などとは逆に、主要剥離面周縁部に二次加工を施し刃をつけている。Ｓ24では下部にのみ加工が施され刃がつけられている。

削器（Ｓ25・Ｓ26）（第18図、図版10）

削器は２点出土した。Ｓ25は、主要剥離面をそのまま残し裏面としている。刃部は、表面の両側縁調整が施されている。Ｓ26では、表面右側縁に調整を施す。

トランシェ様石器（Ｓ27）（第19図、図版10）

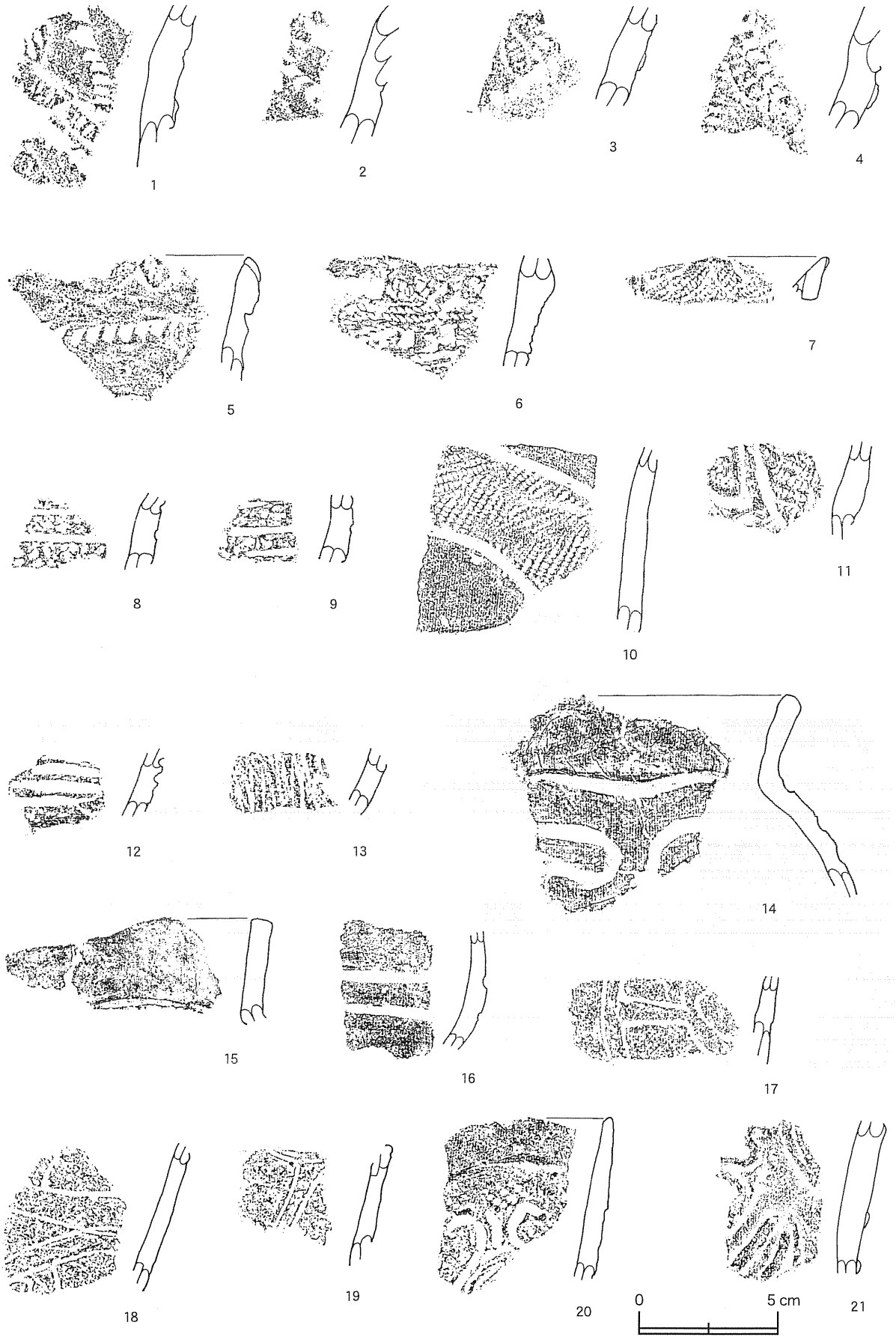
トランシェ様石器は1点出土した。横長剥片を素材にしており、刃部は直刃状をなす。素材となる剥片を取り出す際の剥離によって生じた鋭い縁辺を、そのまま刃部として使用している。

打製石斧（Ｓ28）（第19図、図版10）

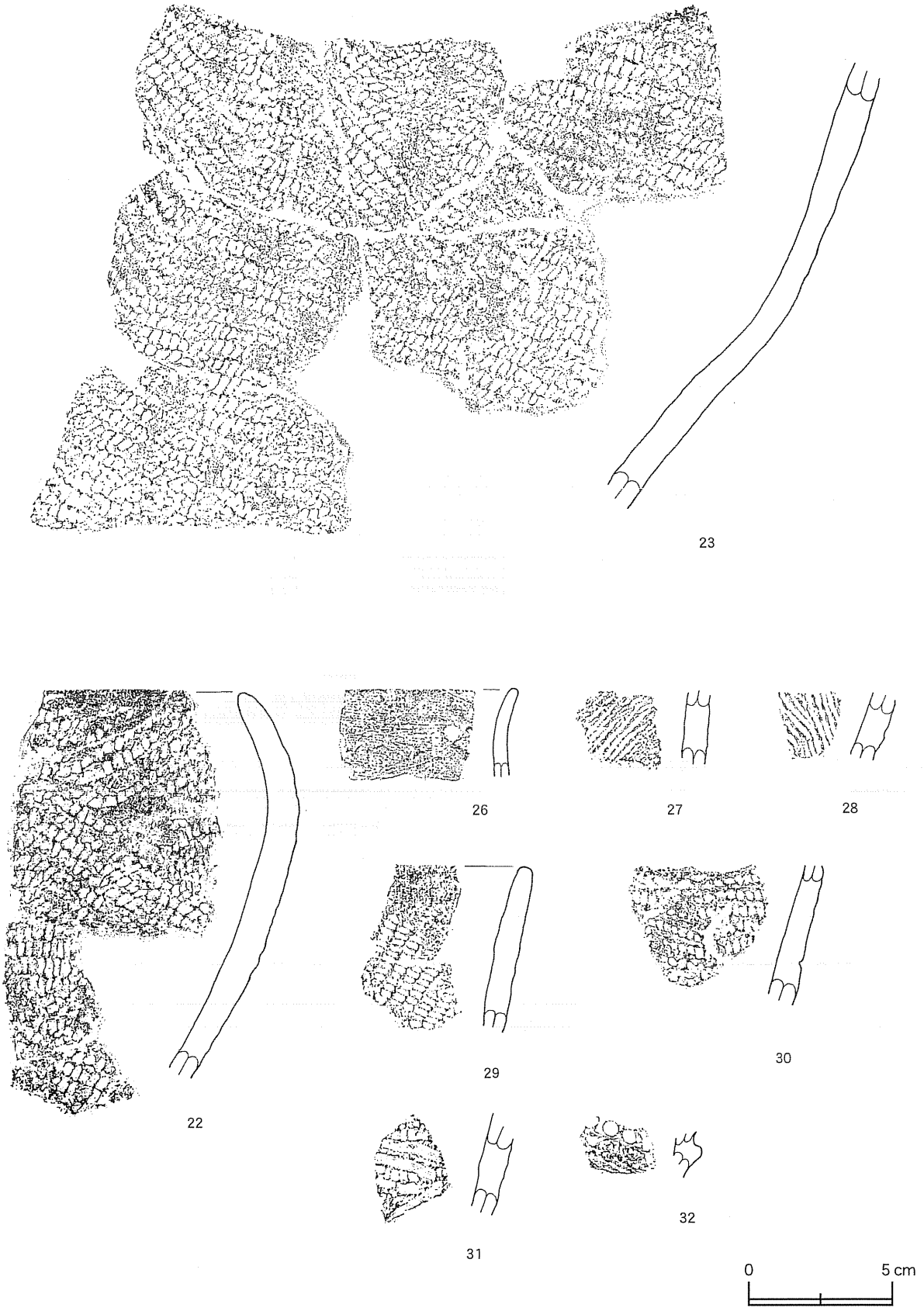
打製石斧は1点出土した。表面の刃部が急角度をなす片刃石斧である。その部分の自然面を除いた両面には、全面的な剥離調整が施されている。刃部の調整は比較的粗い。

磨製石斧（Ｓ29）（第19図、図版10）

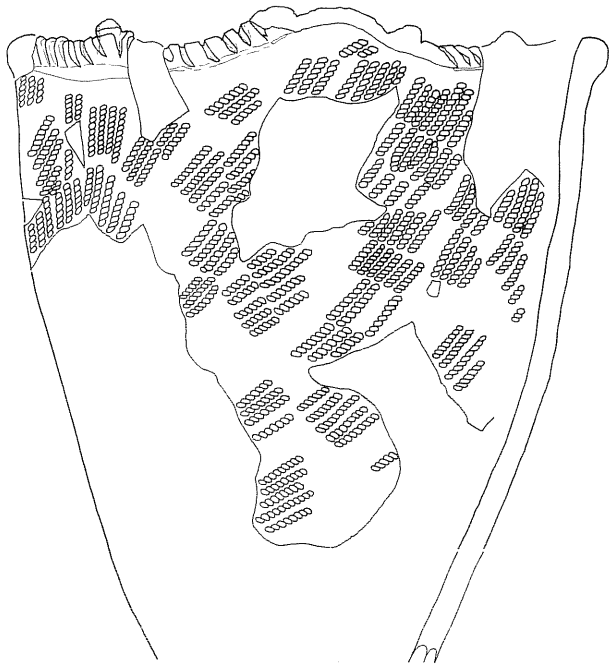
磨製石斧は１点出土した。上部は欠損し、表面が剥落している。その他の面は全面研磨されている。刃部は弱凸強凸片刃であるが欠けている。



第13図　遺構外出土土器（１）



第14図　遺構外出土土器（２）

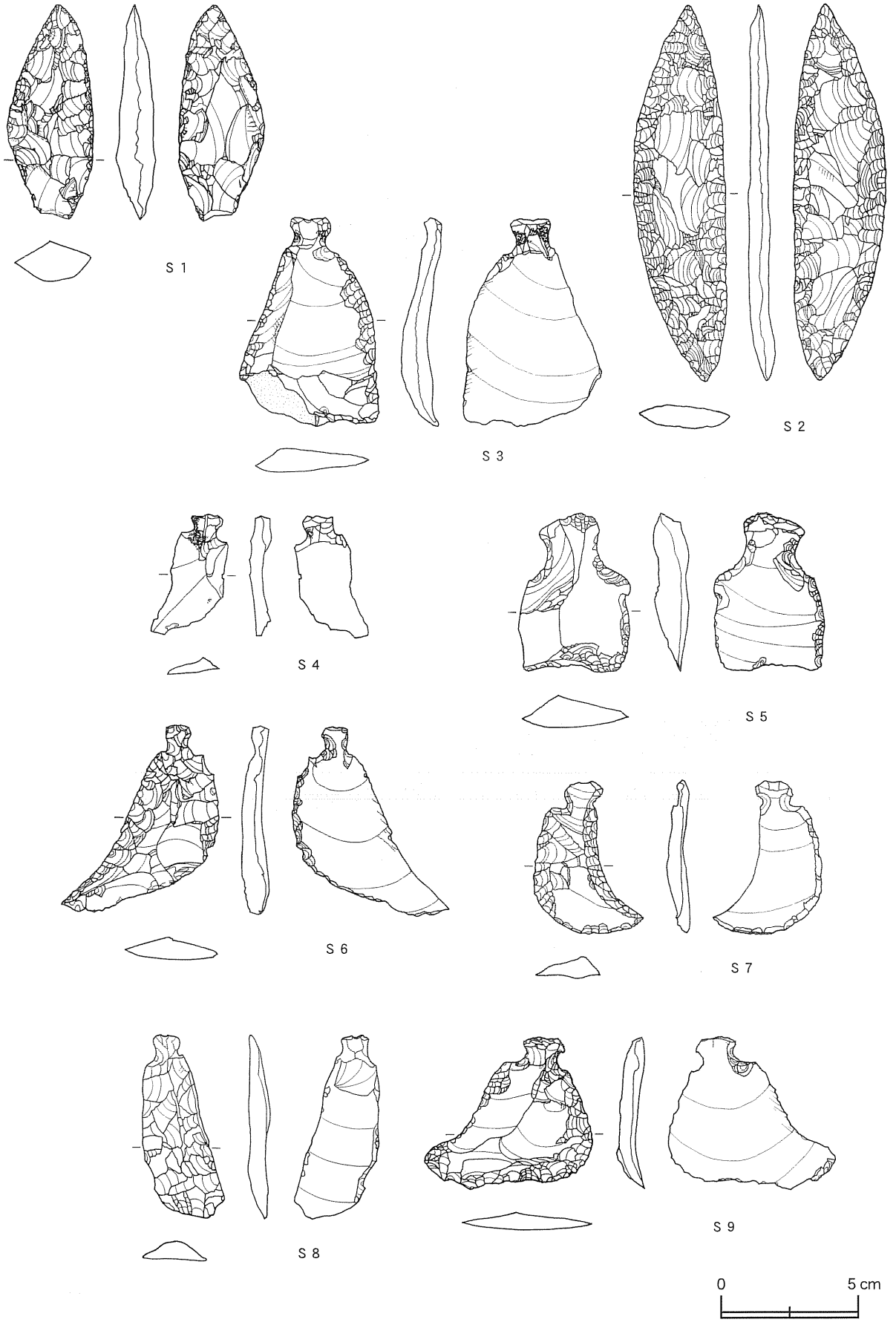


24

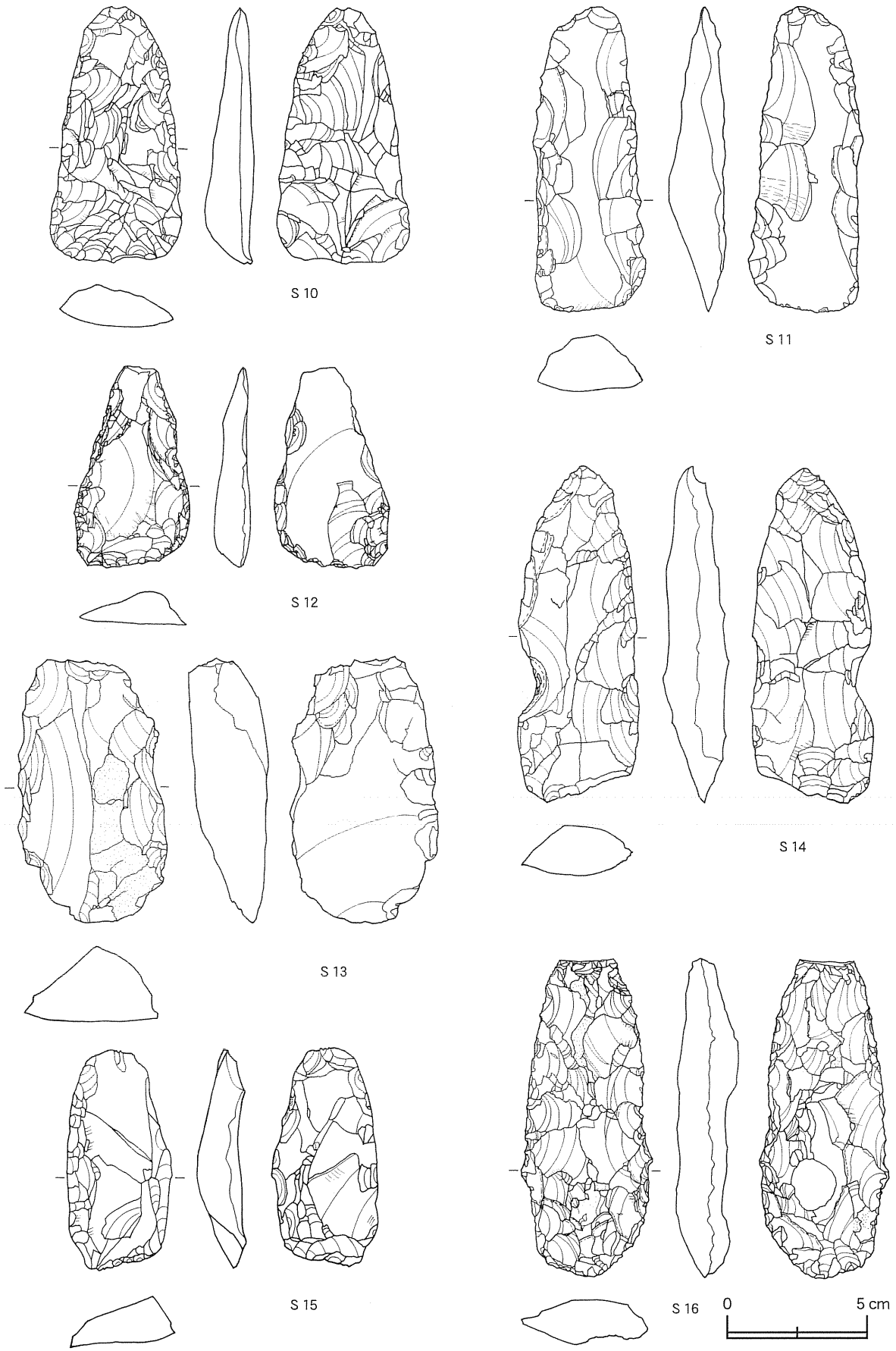
25

0　5 cm

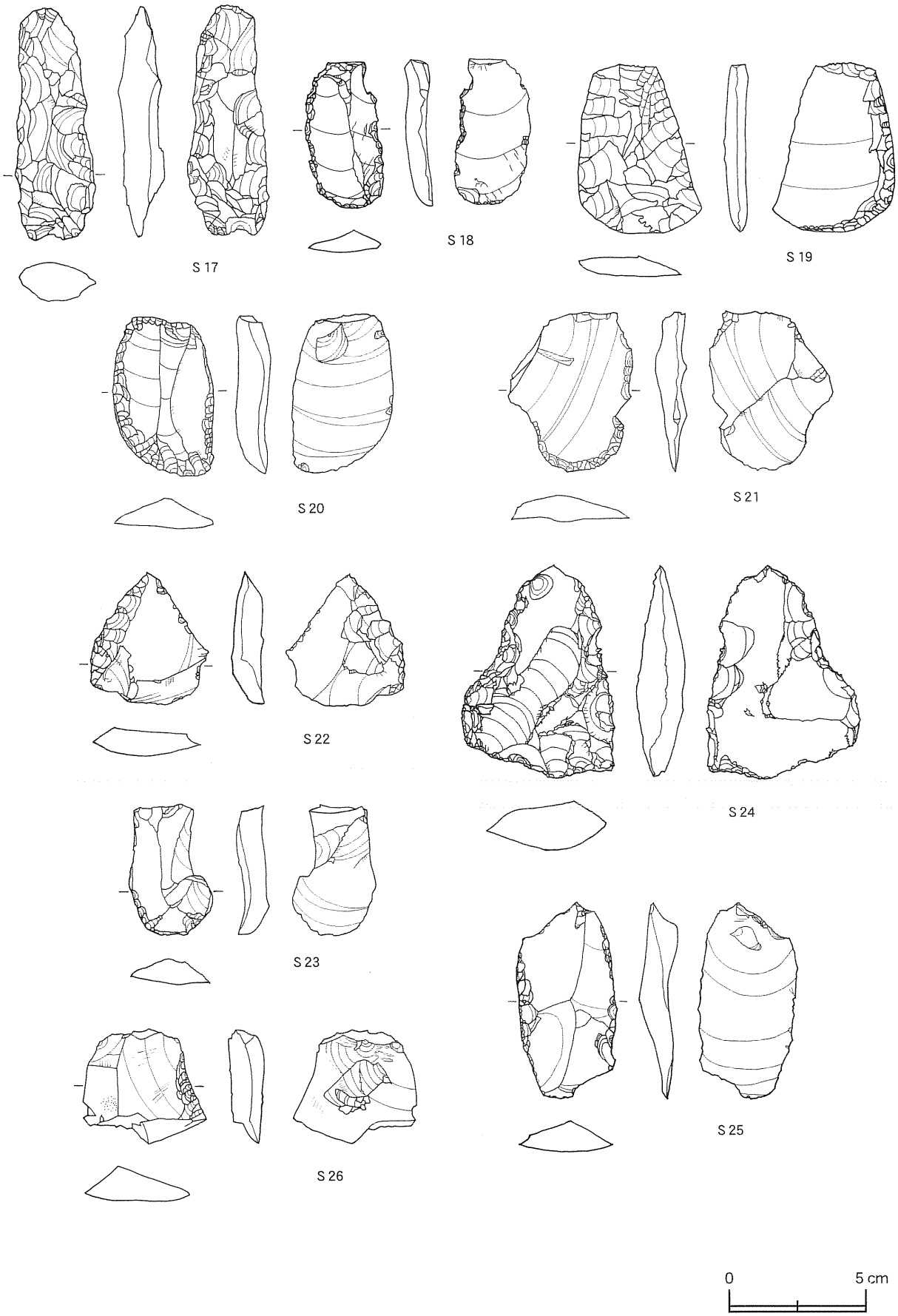
第15図　遺構外出土土器（３）



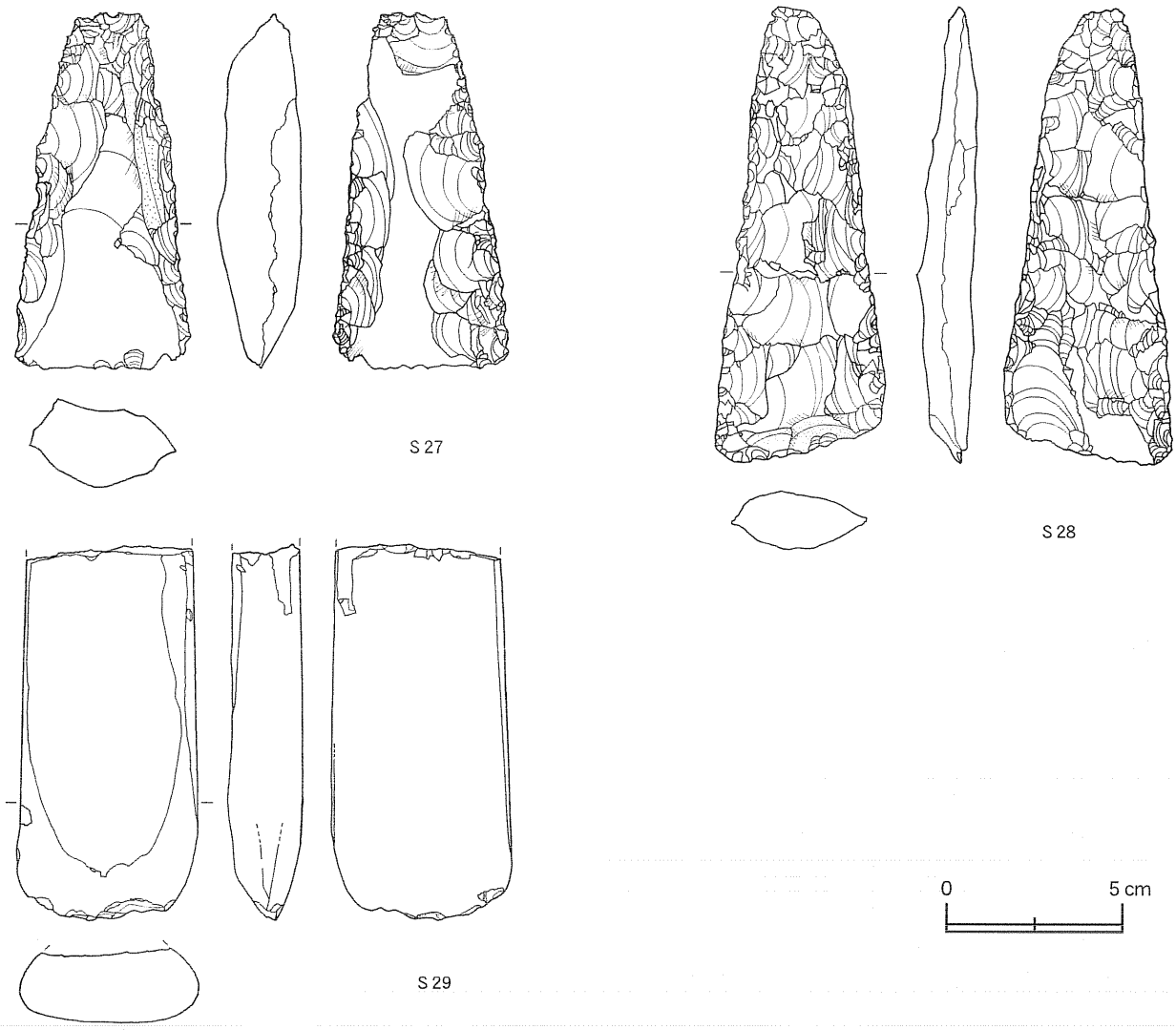
第16図　遺構外出土石器（１）



第17図　遺構外出土石器（２）



第18図　遺構外出土石器（３）



挿図番号	番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
16	S1	MH31	石槍	77.5	31.0	14.5	27.5
16	S2	MB37	石槍	135.0	33.5	8.5	37.9
16	S3	ME41	石匙	79.0	50.5	10.5	32.8
16	S4	MH30	石匙	47.5	19.5	6.0	4.7
16	S5	MI31	石匙	57.5	38.5	12.5	22.1
16	S6	MI33	石匙	79.0	34.5	7.0	17.0
16	S7	MF29	石匙	57.0	27.0	7.5	10.0
16	S8	MI31	石匙	69.5	24.5	8.0	12.0
16	S9	範　確	石匙	67.0	60.0	7.0	17.7
17	S10	MI39	石篦	92.5	48.5	18.0	67.4
17	S11	MI32	石篦	108.5	40.0	21.0	73.6
17	S12	MB35	石篦	73.0	40.5	13.5	32.7
17	S13	MA35	石篦	94.0	53.5	28.0	117.0
17	S14	MF35	石篦	(120.0)	45.0	23.5	93.1
17	S15	MG42	石篦	78.5	39.0	16.0	47.8
17	S16	MA32	石篦	115.5	45.5	22.0	106.2
18	S17	MI41	石篦	84.5	29.5	16.0	35.4
18	S18	MF29	掻器	54.5	27.0	8.5	10.3
18	S19	MH39	掻器	64.0	42.0	8.0	23.1
18	S20	MB35	掻器	62.0	36.5	11.0	27.5
18	S21	MA35	掻器	60.0	43.5	9.5	21.6
18	S22	MI36	掻器	49.0	45.5	11.5	17.8
18	S23	MF34	掻器	76.5	56.5	16.0	59.2
18	S24	MA35	掻器	49.0	29.5	10.5	13.6
18	S25	LS33	削器	73.0	36.0	11.0	23.4
18	S26	範　確	削器	40.0	45.0	14.0	20.7
19	S27	MI31	トランシェ様石器	106.5	50.0	22.0	100.5
19	S28	MF35	打製石斧	127.5	48.5	16.5	87.1
19	S29	MD40	磨製石斧	(104.0)	51.0	21.0	233.5

（　　）は残存値

第４表　遺構外出土石器観察表

第19図　遺構外出土石器（４）

第５章　自然科学的分析

第１節　姫ヶ岱Ｃ遺跡出土炭化材の樹種同定

１　試料

試料は、姫ヶ岱Ｃ遺跡（２HGT-C）より出土した炭化材３点である。

２　方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３　結果

結果を次表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

No.	遺構	種　　類	樹種（和名／学名）
1	SK02	炭化物	ブナ属　　Fagus
2	SK05	炭化材	ｺﾅﾗ属ｺﾅﾗ節　Quercus sect. Prinus
3	SN09	炭化物	針葉樹　　conifer

a.針葉樹　conifer

横断面、放射断面、接線断面共に保存状態が悪く、針葉樹の特徴を示すが、それ以上の同定は困難であった。なお本試料は、樹脂細胞が存在し、また樹脂道や、道管内壁にらせん肥厚が存在しないので、スギまたはヒノキ科の可能性が高い。

b.ブナ属　Fagus　ブナ科　　図版11

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは２～３個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、２～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、靭性あり、保存性は低い。容器などに用いられる。

ｃ.コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　　図版11

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

４　所見

同定された樹種は、針葉樹、ブナ属、コナラ属コナラ節であった。これらの樹種は、冷涼な温帯上部の冷温帯の気候を示唆する。なお、これらの試料は、落射顕微鏡（金属顕微鏡）下で反射光が著しいことなどから、燃焼により生成された炭化材と考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20－48.
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49－100.

第２節　姫ヶ岱Ｃ遺跡における放射性炭素年代測定結果

１　試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	2HGT-C SK02	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法
No.2	2HGT-C SK05	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.3	2HGT-C SN09	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法

２　測定結果

試料名	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦　年　代 交点（1σ）	測定№. (Beta-)
№.1	3340±60	−26.3	3320±60	BC1605 (BC1670～1515)	111867
№.2	3390±60	−26.9	3360±60	BC1645 (BC1705～1535)	111868
№.3	1090±50	−26.3	1070±50	AD990 (AD960～1015)	111869

１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

２）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C ^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σは補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ値が表記される場合もある。

第6章　まとめ

姫ヶ岱Ｃ遺跡の発掘調査は、姫ヶ岱Ｄ遺跡の発掘調査終了後の1997（平成９）年８月25日から10月９日の間、遺跡総面積8,600m²のうちの2,000m²について行われた。残りの6,600m²の発掘調査は、1998（平成10）年度に森吉町教育委員会が実施した。

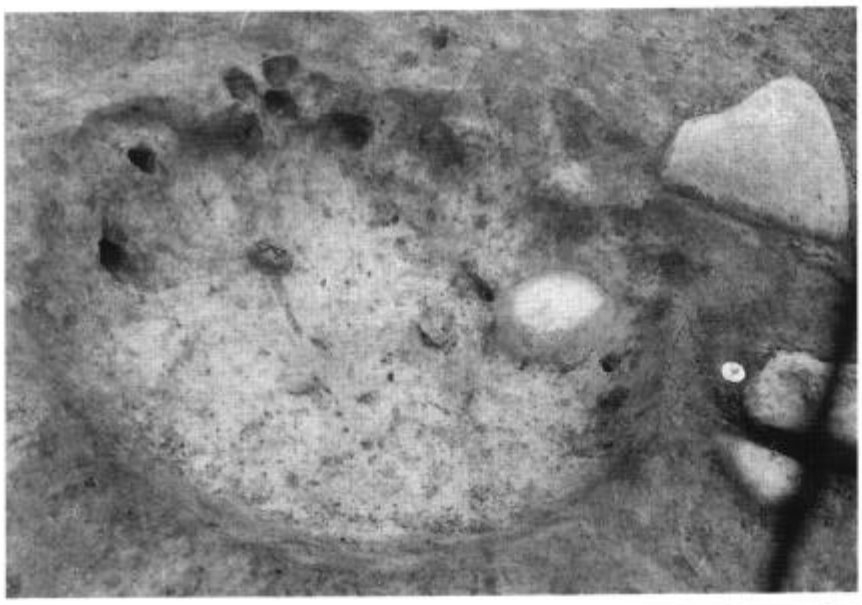
秋田県教育委員会で行った姫ヶ岱Ｃ遺跡の調査範囲は、遺跡の南側にあたり、土坑11基、石囲炉１基、焼土遺構２基の計14の遺構を検出した。この中で、石囲炉は石囲部と掘込部を持つ、いわゆる「複式炉」と考えられる。複式炉は縄文時代中期後葉に東北地方南半に多く見られる形態の炉で、同時期の集落のあったことが予想される。また調査区ほぼ中央にあるＳＫ02から、縄文時代中期の土器が出土し、ＳＫ12では縄文時代後期前葉の十腰内Ｉ群期前半の壺形土器が出土したことから、姫ヶ岱Ｃ遺跡は縄文時代中期から後期にかけての集落跡と考えられる。

遺物は、土器は縄文時代中期から後期を中心に、晩期まで出土している。石器では、石槍・石匙・掻器・削器・トランシェ様石器・打製石斧・磨製石斧が出土した。石槍は２点とも半月形石槍で、うち１点は比較的古い時期である可能性が高い。石匙では、縦型がほとんどで、横型は範囲確認調査時に採集された１点のみであった。その中には、アスファルトが付着した物が２点出土しており、遺跡周辺に産出地が確認されていないことから、他地域との交易が行われていたことをうかがわせる。またトランシェ様石器は、縄文時代早期から前期にかけて制作されたと考えられているので、この時期に縄文人が生活していたと考えられる。

今回の調査では限られた範囲での検討しかできず、遺跡全体の性格等核心に触れることができなかった。1998（平成10）年度に行われた森吉町教育委員会による調査結果によって、遺跡の性格が判明する事を期待するものである。

図版1

姫ヶ岱C遺跡　遠景
（南東→北西）



ＳＫ02　完掘状況
（北→南）

ＳＫ03　完掘状況
（西→東）

図版2

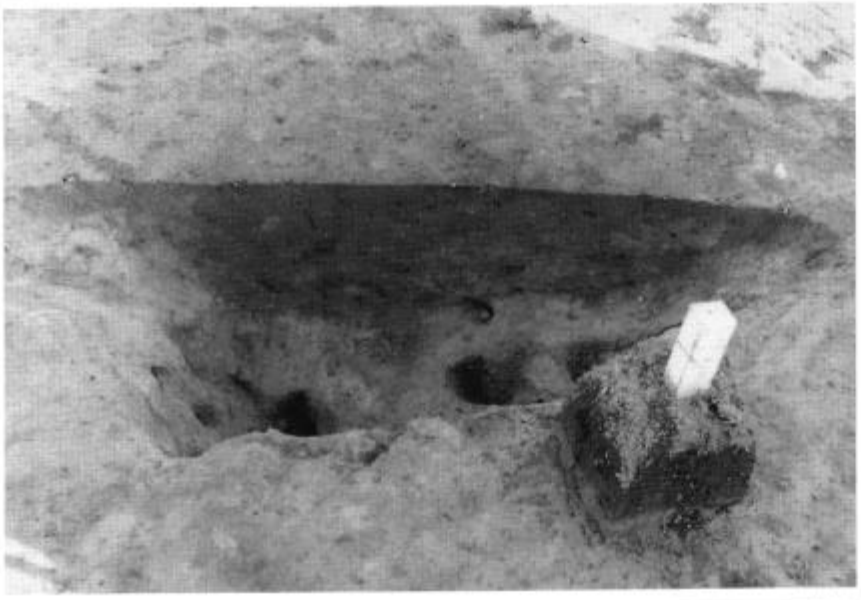
ＳＫ04　完掘状況
（南→北）

ＳＫ05　炭化材出土状況
（南→北）

ＳＫ07　完掘状況
（南西→北東）

図版3

ＳＫ08　完掘状況
（南西→北東）



ＳＫ11　土層断面
（北西→南東）

ＳＫ12　遺物出土状況
（北東→南西）

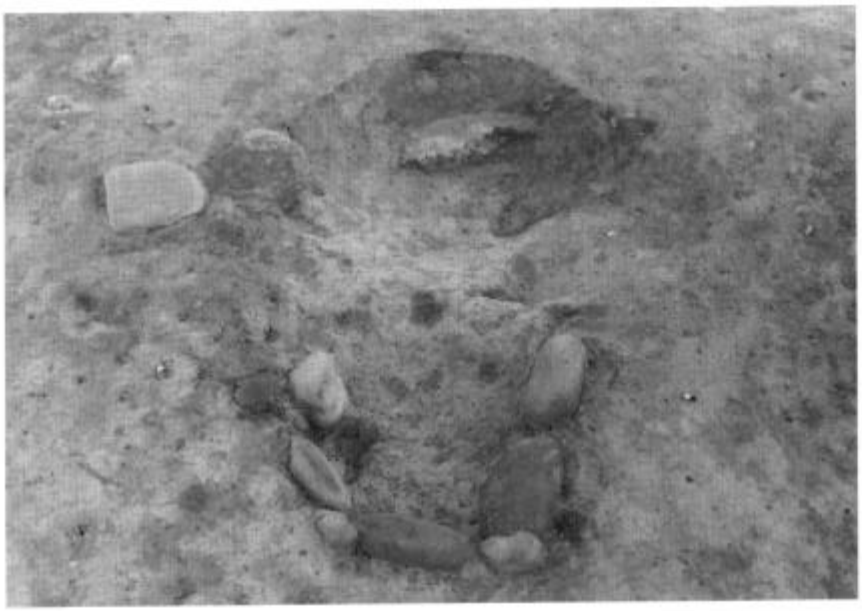
図版4

ＳＫ13　完掘状況
（南→北）

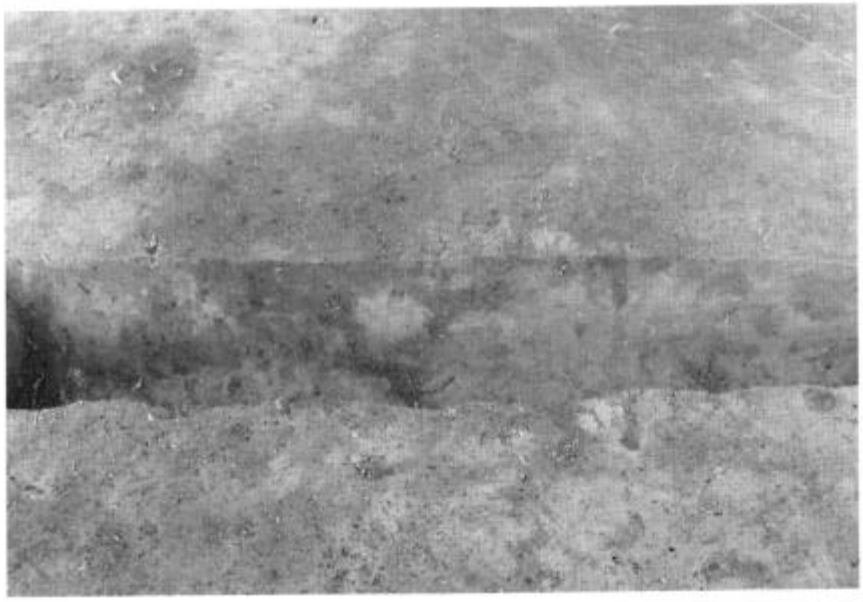
ＳＫ14　完掘状況
（北東→南西）

ＳＫ16　完掘状況
（南西→北東）

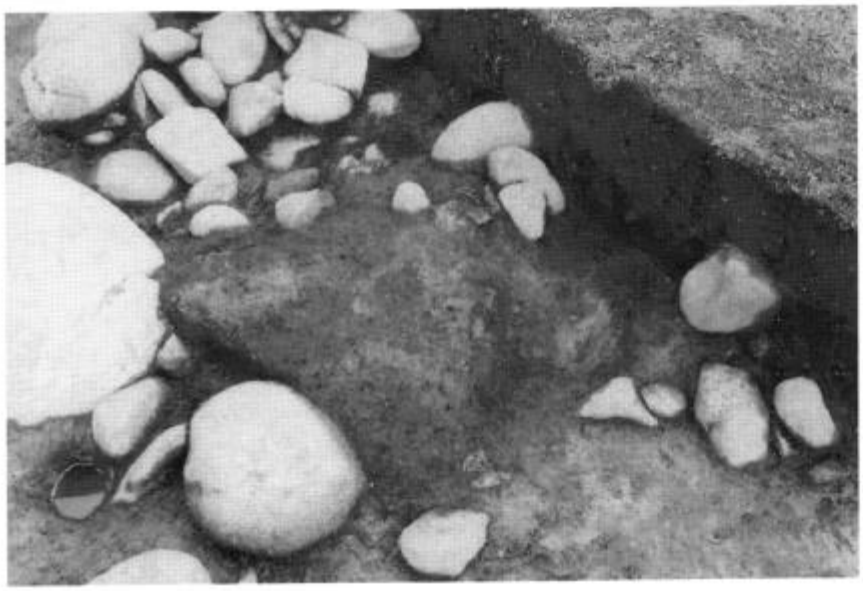
図版5



S Q 10　完掘状況
（西→東）



S N01　土層断面
（南西→北東）



S N09　確認状況
（南西→北東）

SK02－1

SK02－2

SK02－3

SK02－4

SK02－5

SK02－6

SK02－7

SK03－1

SK03－2

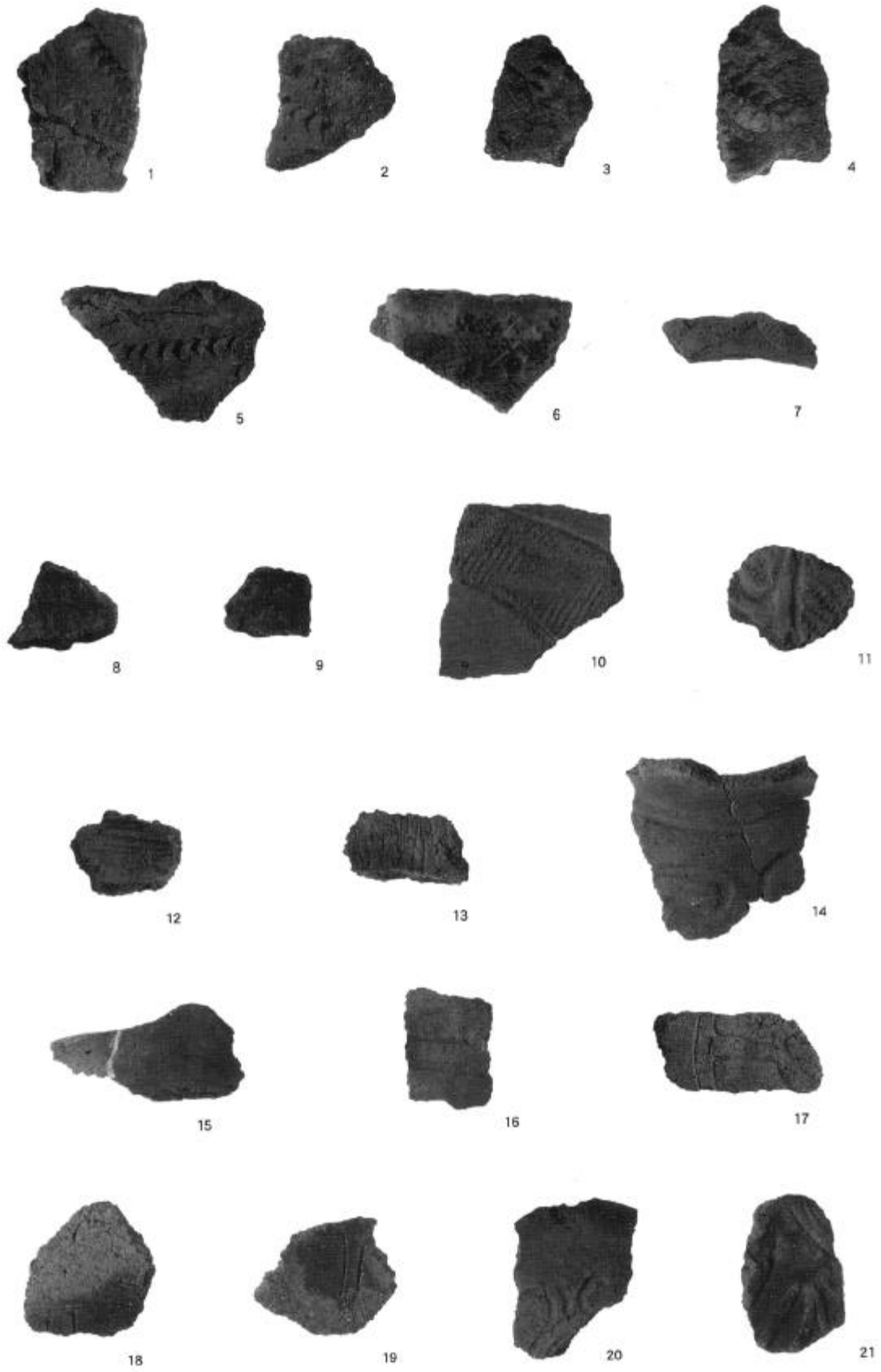
SK04

SK13

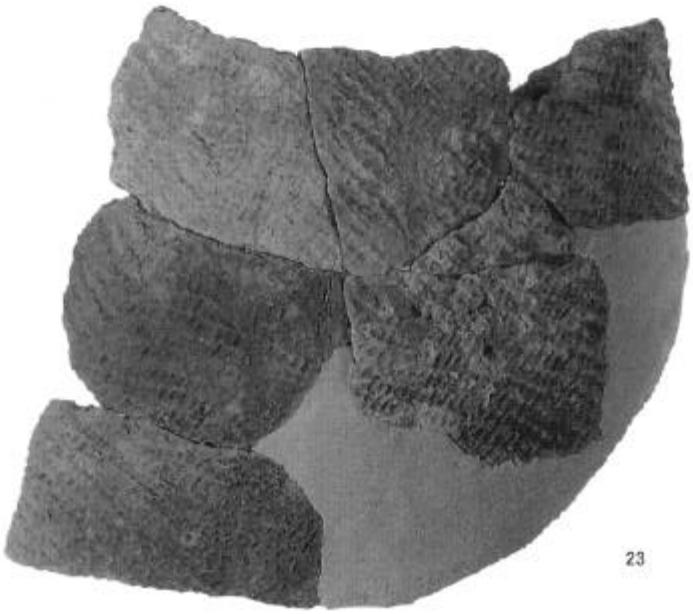
SK12

遺構内出土遺物

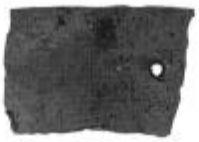
図版7



遺構外出土土器（1）


23

22


26

27

28

29

30

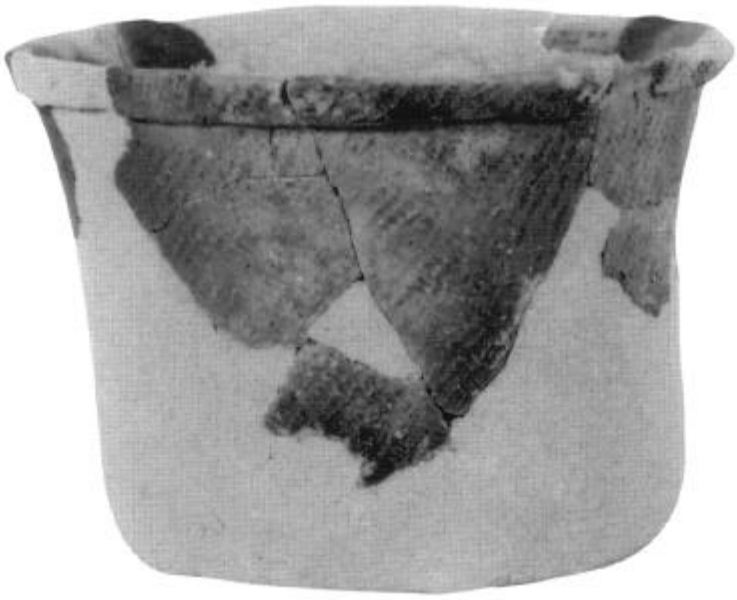
31

32

遺構外出土土器（2）

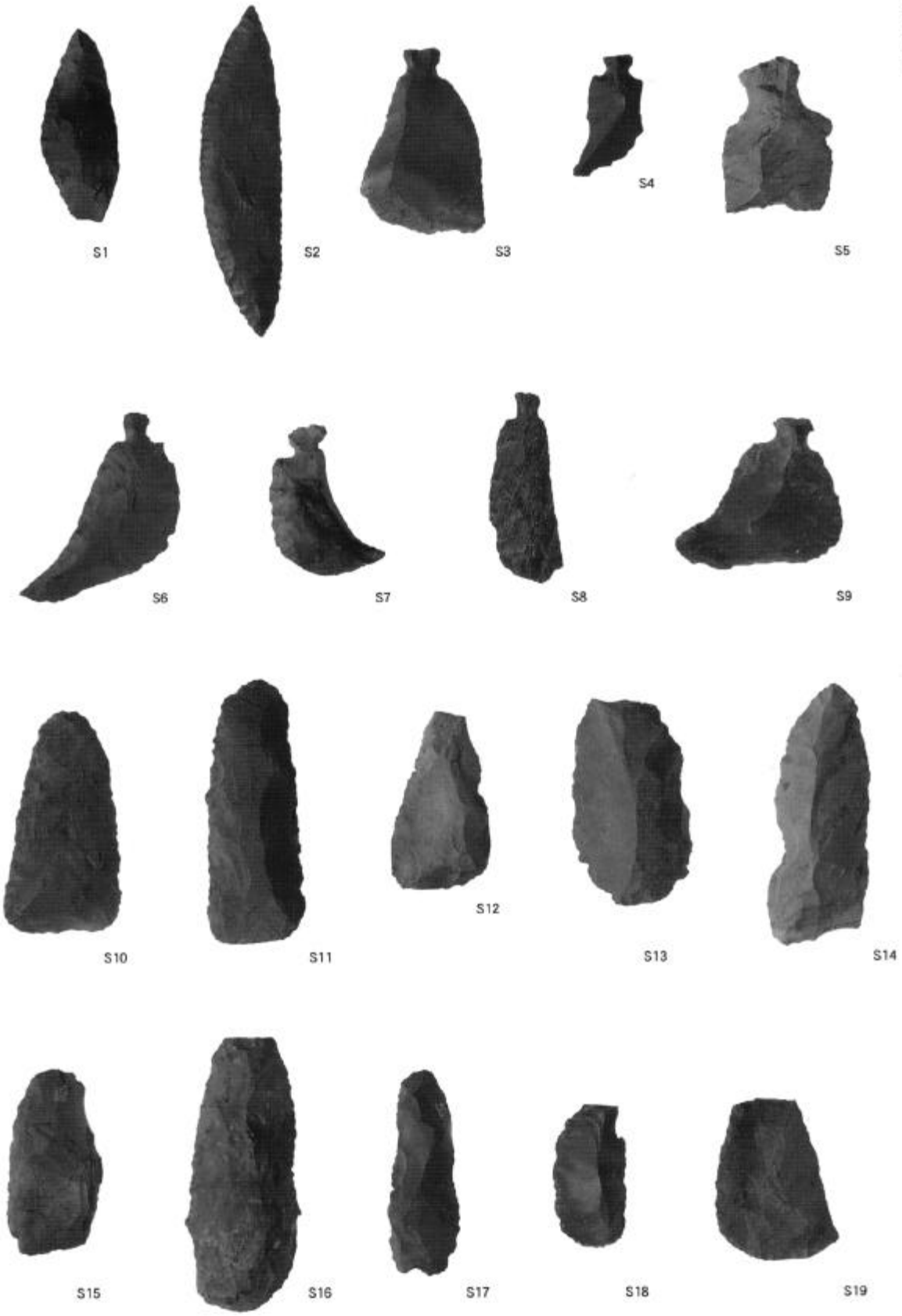
図版9

24



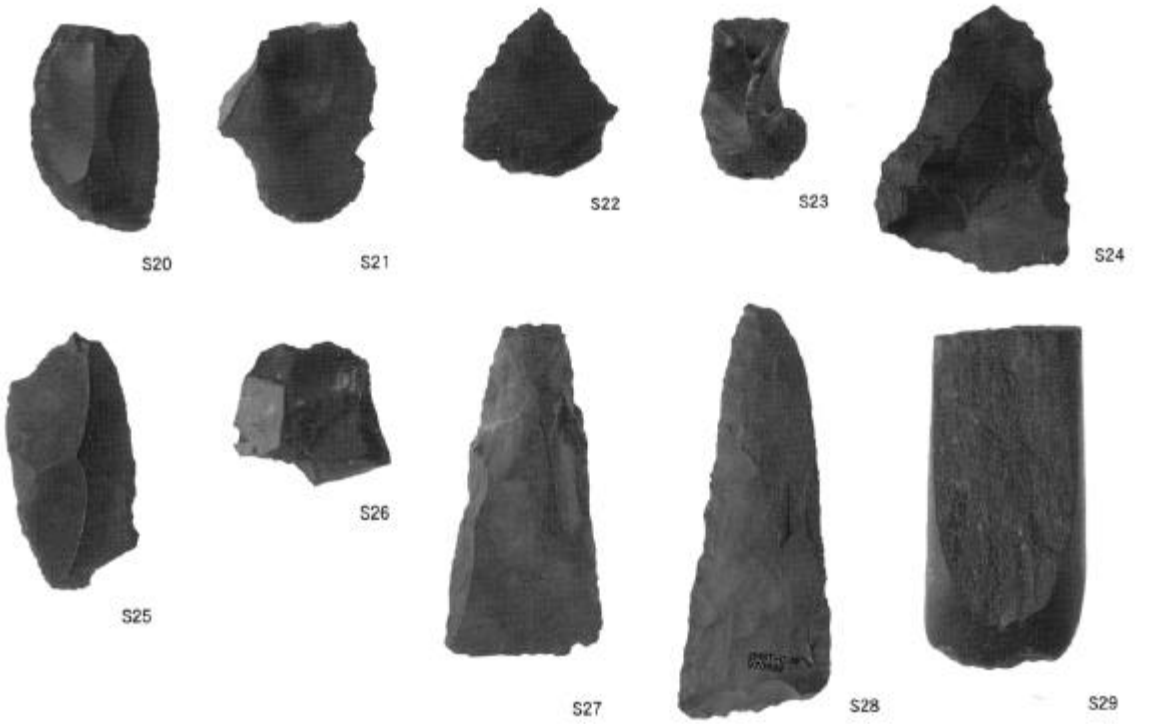
25

遺構外出土土器（3）

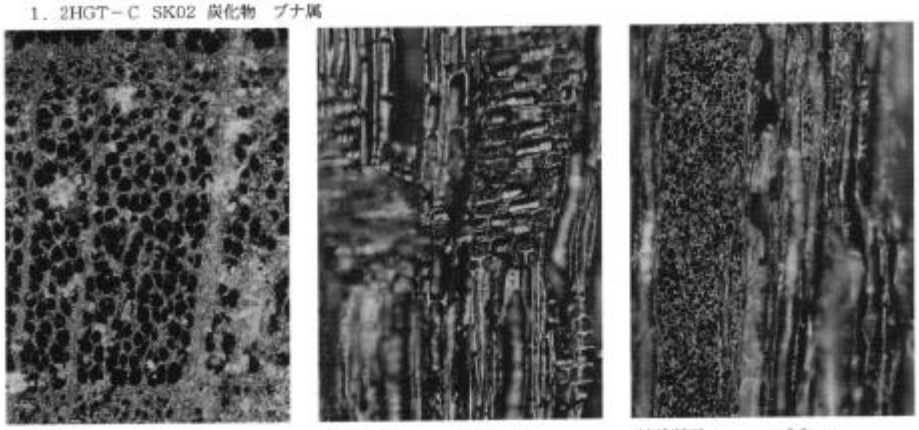


遺構外出土石器（1）

図版11

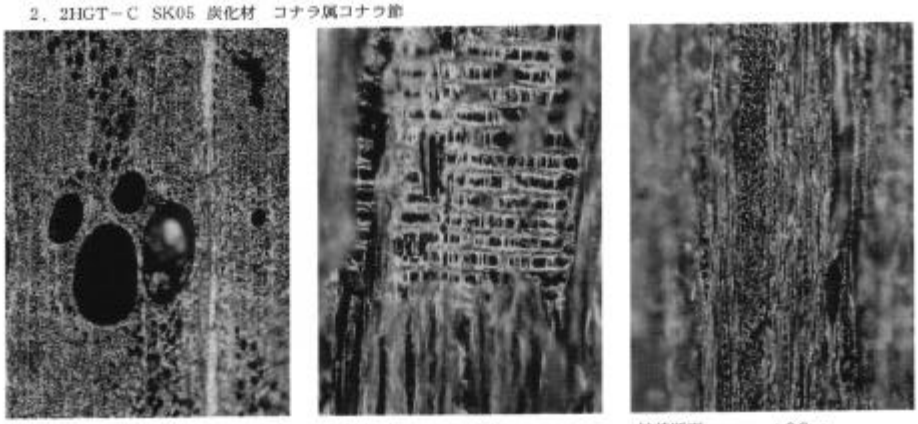


1．2HGT－C SK02 炭化物 ブナ属



横断面 ――― ：0.4mm　放射断面 ――― ：0.1mm　接線断面 ――― ：0.2mm

2．2HGT－C SK05 炭化材 コナラ属コナラ節



横断面 ――― ：0.4mm　放射断面 ――― ：0.1mm　接線断面 ――― ：0.2mm

遺構外出土石器（2）・出土炭化材の顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	ひめがたいいせき
書名	姫ヶ岱C遺跡
副書名	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第287集
編著者名	吉川孝・牧野賢美
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　TEL 0187－69－3331
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所収遺跡名	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひめがたいいせき 姫ヶ岱C遺跡	あきたけんきたあきたぐんもりよし 秋田県北秋田郡森吉 まちねもりだあざひめがたい 町根森田字姫ヶ岱12 －2外	05323	－	40° 02′ 16″	140° 28′ 17″	19970825 ～ 19971009	2,000㎡	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姫ヶ岱C遺跡	集落跡	縄文時代	土坑　11 配石遺構　1 焼土遺構　2	縄文土器・石器	全遺跡範囲8,600㎡の内の2,000㎡についての報告

あ と が き

姫ヶ岱C遺跡の発掘調査は、秋田県教育委員会による森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査としては深渡遺跡・姫ヶ岱D遺跡と同じく初めて行われたものである。森吉山ダム建設事業に係る遺跡は60遺跡あり、一部は日本ジャンボリー開催にあわせての道路整備事業に関わって先に発掘調査が行われた遺跡もあるが、これから数年にわたって遺跡の発掘が進められていくこととなっている。今後の発掘調査の成果が楽しみである。

最後に、この報告書の作成にあたり協力して下さった秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室の和田哲郎非常勤職員他、作業員の方々に対し感謝の意を表し、和田非常勤職員以外の方の芳名を記す。

高田光子・高橋まき子・奈良節子・新田　優

（五十音順）

秋田県文化財調査報告書第287集

姫ヶ岱C遺跡

―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―

印刷・発行　平成11年3月

編　集　秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802　仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話 0187(69)3331　Fax 0187(69)3330

発　行　秋田県教育委員会

〒010-0951　秋田市山王4丁目1番2号

電話 018(860)3193

印　刷　株式会社成文社